

加賀  
ふるさと  
検定

# 加賀市 歴史文化 学習帳Ⅰ

# 歴史 編



# 加賀市をもっと知り もっと好きになる!

未来へと受け継がれる素晴らしい加賀市の文化遺産。

ふるさとを深く知ること、いつもの見慣れた景色もひと味もふた味も  
違って見えてくる。

文化庁  
AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS

平成26年度文化庁文化芸術振興費補助金(文化遺産を活かした地域活性化事業)



加賀商工会議所キャラクター  
「商子ちゃん」  
しょうこ



# 加賀市 歴史文化 学習帳 I

歴史  
編

加賀市文化財総合活用事業実行委員会  
加賀ふるさと検定・おもてなし講座実行委員会

## はじめに

北陸新幹線金沢駅の開業にともない、首都圏から加賀市に訪れる人は格段に増加するものと期待されています。今、私たちに求められているのは「ふるさと意識」や「おもてなし意識」の高揚ではないでしょうか。

平成 25 年度より、加賀商工会議所及び山中商工会では各種団体と連携し、「加賀ふるさと検定・おもてなし事業」をスタートさせました。そのきっかけは、加賀商工会議所の若い人たちで組織する青年部が、加賀市の市民政策提案に応募し、その第 1 号として採択を受けたことでした。

第 1 回目のふるさと検定初級試験には、280 名に及ぶ市民の方々が受験されました。この中には、職場でチームをつくりグループ受験をされた事業所や 1 学年全員で団体受験をした高等学校もありました。87 歳の高齢で受験され見事合格バッジを手にした方もおられました。まさに老若男女、数多くの市民の方々がふるさとの歴史や文化を意欲的に学び、検定試験にチャレンジされたのです。

今回、ふるさと検定を受験される方々のための参考書ともいえるべき「学習帳」を文化庁のご支援をいただくことで発刊することができました。学習帳は「歴史編」「自然・動植物・民俗・文化財編」「産業・人物編」「地図・年表・模擬試験編」の 4 部に分かれています。4 冊全てをひととおりに読んでいただくことで、加賀市全体の歴史や自然、産業などが理解できるようになっています。

是非とも、多くの市民の皆様方にこの学習帳をお読みいただき、その結果、ふるさとへの愛着と誇りがなおいっそう高まることを期待するものであります。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご多忙のところ短期間でご執筆いただきましたテキスト作成委員の皆様方に心から感謝を申し上げ、発刊にあたってのご挨拶とさせていただきます。

平成 26 年 8 月

加賀ふるさと検定・おもてなし講座実行委員会  
会長 新家 康三（加賀商工会議所会頭）

# 目次

## 古代編

旧石器時代	8
縄文時代	9
弥生時代	10
古墳時代	11
飛鳥・奈良時代	14
平安時代	15

## 中世編

鎌倉・室町・戦国時代	
源平合戦と実盛伝承	18
東国御家人と在地領主	19
中先代の乱と狩野一党	19
土豪の荘園侵略	20
貴族の下国	21
時宗と実盛供養	21
蓮如と吉崎道場	22
文明・長享の一揆	23
朝倉氏と永正一揆	24
加州三ヶ寺体制の支配	24
享祿の錯乱と本願寺支配	24
朝倉宗滴の江沼侵略	25
一向一揆の終わりと織田軍の進出	26

江戸時代	
大聖寺城主 溝口秀勝の時代	28
山口玄蕃頭宗永と大聖寺合戦	28
前田利長の江沼郡支配	29
大聖寺藩の成立	30
灰塚論争と3人の殉死者	31
支配機構と歴代藩主	31
江沼神社と長流亭	32
実性院と全昌寺	33
十村制度と郷村制度	33
参勤交代と北国街道	34
大聖寺川の舟運	35
采女事件と政治抗争	35
正徳の百姓一揆	36
伊能忠敬の大聖寺藩領測量と海防策	36
藩財政と十万石の高直し	37
山中温泉・山代温泉の発祥と隆盛	37
後藤才次郎と九谷焼	38
九谷焼の再興	38
山中塗りの歴史	39
大聖寺の絹織物	39
北前船の活躍と3つの拠点	39
その他の産業	40
芭蕉と北陸行脚	42
大聖寺藩の学問と芸術	42
大聖寺城下町の文化と茶の湯	43
山中節の発祥	44

幕末・維新时期

廃藩置県と町村区画の変遷 .....46

パトロン事件 .....46

浦上キリシタンの預かり .....47

みの虫一揆 .....47

明治・大正期

明治天皇の北陸巡幸 .....47

加州松島社と鉛筆製造 .....48

九谷焼の振興 .....48

絹織物業と製糸業の発展 .....49

リム・チェーンの製造 .....49

大聖寺博覧会の開催 .....50

大聖寺川を利用した水力発電事業 .....50

大津事件と北ヶ市市太郎 .....50

八十四銀行の創業と破綻 .....51

片山津温泉の発展 .....52

議会と選挙 .....52

町村の財政 .....53

近代の教育 .....54

近代の戦争と犠牲者 .....55

北陸線の開通と電車網の整備 .....55

昭和時代

新憲法と選挙 .....56

江沼郡の農地改革 .....57

福井震災と郷土 .....57

学問と芸術 .....57

加南線の廃止と加賀温泉駅の誕生 .....58

加賀市の誕生 .....59

#### 【凡 例】

①本書は、平成 20 年 3 月に加賀市教育委員会が作成した『加賀市歴史文化基本構想』の普及版として、文化庁の「文化遺産を活かした地域活性化事業」の助成を受けて作成したもので、加賀ふるさと検定のテキストにも活用するものである。

②本書は、第 1 部「歴史編」、第 2 部「自然・動植物・民俗・文化財編」、第 3 部「産業・人物編」、第 4 部「地図・年表・模擬試験編」の 4 分冊となっており、4 冊全体で加賀市の歴史・自然・産業などを通覧することができるようになっている。

③本書第 1 部「歴史編」は、江沼地方史研究会に所属する山口隆治、伊林永幸、見附裕史、田嶋正和の 4 名が執筆した。

④本文中の写真は、中村準一が撮影した。但し、一部の写真においては、『加賀市史』『大聖寺町史』『片山津町史』『ふるさとの写真集加賀江沼』『加賀市の文化財』『加賀江沼人物事典』などから転載したものもある。

⑤記述内容に特に表記がなければ、平成 26 年 4 月を基準としている。

⑥記述内容で諸説がある場合は、最も一般的と思われる説のみを記載しているが、その他の説を否定するものではない。

# [古代編]

旧石器時代／縄文時代／弥生時代／古墳時代  
飛鳥・奈良時代／平安時代

## 古代編

加賀市には、縄文、弥生、古墳時代を中心とした埋蔵文化財が、これまでにおよそ 850ヶ所余り確認されており、当市は、県内有数の遺跡の密集地となっています。古代遺跡が多いということは、この地域が、水に恵まれた自然豊かなところであり、とても住みよい土地であったともいえます。



柴山湯から望む白山連峰

市内の 850 余りの遺跡の中には、国の史跡に指定されている勅使町の法皇山横穴群や二子塚町の狐山古墳をはじめとした、全国的にも有名な遺跡があります。

その他の遺跡でも、1 万年以上前の旧石器時代から現代まで、途切れることなく各時代の痕跡が加賀市内で確認できます。市町村単位で各時代の痕跡をすべて確認できる地域は全国的にも少なく、こうした多種多様な遺跡は加賀市が全国に誇れる歴史遺産といえます。また、これらの遺跡

は、先人たちの知恵や技術の変遷を知る上で欠くことのできない財産であり、教育や観光にも活用できる貴重な資産でもあります。

それでは、このあとは、旧石器、縄文、弥生、古墳の各時代を代表する市内の遺跡を順に見ていきましょう。

## 旧石器時代

私たちのふるさと加賀市における最も古い人類の痕跡は、宮地町にある琵琶ヶ池の近くで見つかった宮地向山遺跡です。この遺跡は、旧石器時代（今からおよそ 1 万 3 千年以上も前）のものですが、ここからは玉髄や珪質岩などのきわめて硬い石材で作られた石刃や搔器などが見つかっています。また、橋立町大野山で発見された斧形石器と槍先形尖頭器は、旧石器時代の終わり頃か縄文時代始め頃の遺物と推定されています。

橋立丘陵と呼ばれる加賀市北部の丘陵地には、石川県内でも最古級の遺跡が続けて発見されており、さらに貴重な遺跡が発見される可能性を秘めています。



琵琶ヶ池（宮地町）

## じょうもん 縄文時代

今から約1万2千年前から約2千4百年前を「縄文時代」と呼んでいます。市内の縄文時代遺跡の中で特に代表的なものとしては、「橋立大野山遺跡」<sup>はしたてのおのやま</sup>「柴山水底貝塚」<sup>しばやますいていかいづか</sup>「柴山貝塚」<sup>しばやまかいづか</sup>「横北遺跡」<sup>よこぎた</sup>「藤の木遺跡」などをあげることができます。

縄文時代早期（今からおよそ9千年前）の橋立大野山遺跡からは、県内最古の土器が出土しています。この土器は<sup>せんてい</sup>尖底<sup>だえんおしがた</sup>楕円<sup>もんどき</sup>押型<sup>とが</sup>文土器<sup>ほうだん</sup>と呼ばれ、底部が尖った砲弾のような形をしています。

昭和39年、柴山潟干拓工事の際に湖底約6メートルのところで柴山水底貝塚が発見されました。ここからは無数の貝類や土器片約200点のほか、県内最古の<sup>じんこつ</sup>人骨<sup>きたしらかわしき</sup>などが出土しました。土器は関西の影響を受けた北白川式土器です。

それまでの古い段階では、橋立丘陵やその近辺でしか遺跡は発見されていませんが、縄文時代前期になると、橋立丘陵の南側にも遺跡が広がっています。現在、加賀市津波倉町の加賀自動車学校があるあたりにあった津波倉縄文遺跡からは、縄文時代前期の土器や石器が出土しています。

一方、柴山町の北側、標高30メートルの台地でも縄文時代中期の柴山貝塚が発見されました。ここからは、<sup>さんかくとうけい</sup>三角壩形<sup>どせいひん</sup>土製品をはじめ、8戸におよぶ住居跡が発見され、そのうち4戸には<sup>いしがこ</sup>石囲い<sup>ろあと</sup>の炉跡も確認されました。

大聖寺川右岸の辺りで発見された藤の木遺跡は、県内でも最多の縄文時代中期の土器が発見されています。出土した土器は北陸特有の古府式土器や上山田式土器・大杉谷式



三角壩形土製品（柴山貝塚）

土器のほか、<sup>こふしき</sup>東海<sup>かみやまだ</sup>・近畿系<sup>おおすぎだにしき</sup>土器や、関東系土器です。石器では中京系の石斧や、長野県と群馬県の境にある和田峠産<sup>こくようせき</sup>の黒曜石で作られた刃物などがあり、この地域が縄文時代においても東西文化交流の接点であったことを示しているのです。きれいな石でつくられた装身具なども多数出土しました。

<sup>いぶりはし</sup>動橋川の中流域にあたる東谷口地区の水田の中から数多くの石器や土器が発見されました。これが縄文時代後期<sup>よこぎた</sup>の横北遺跡です。出土遺物の中では、特に県内でも珍しい、

<sup>ひしがた</sup>菱型をした<sup>ちゅうこう</sup>注口土器や<sup>じゅじゅつ</sup>呪術用具とも考えられている<sup>いぎよう</sup>異形土製品などが出土しています。



尖底楕円押型文土器の破片  
（橋立大野山遺跡）

## 弥生時代

日本では、今からおよそ 2,500 年前にはじめて稲作がおこなわれるようになりました。弥生時代のはじまりです。米づくりが行なわれるようになって食糧の安定供給がはかれるようになりました。当地域にも約 2,300 年前の弥生時代前期末には稲作が行なわれたことが柴山出村遺跡や猫橋遺跡で確認されました。

柴山出村遺跡は弥生時代前期末の遺跡で、北陸では最も古い<sup>もみ</sup>籾や県内最古の弥生土器が発見されました。この柴山出村式土器は、東北地方の影響が強く、縄文時代晩期の様式を残した土器でした。また、隣接して柴山水底<sup>しばやますいてい</sup>弥生遺跡も発見されたことから、この周辺では、柴山潟沿岸の湿地をそのまま利用した原始的な稲作が行なわれていたと考えられています。

その他、上河崎町地内でも弥生時代中期の<sup>こまつしき</sup>小松式土器を出土した遺跡が発見され、大聖寺川流域でも比較的早い段階で稲作が行われていたことがわかってきました。

一方、猫橋遺跡は、市内合河町の八日市川にかかる猫橋付近を中心とした広い地域で発見された弥生時代後期の遺跡で「北陸の<sup>とろいせき</sup>登呂遺跡」とも称される有名な遺跡です。この付近では、田んぼを掘ると水が湧き出るほどの湿地帯で、このような環境が木製品などを「水づけ」のまま永く保存するなどの好条件をうみ、1,800 年前のしゃもじ、くわ、はしごなど、貴重な木製品が、ほぼそのままの形で発見されました。また、稲づくりを示す炭化した米粒や大きな柱を使ったと考えられる倉庫跡や平地における住居跡、さらには<sup>ほうけいしゅうこう</sup>方形周溝墓も確認され、こうした数々の遺構や出土物から、この時代、当地には、すでに村を統率する首長が存在していたと思われます。また、この遺跡から出土した土器の形から、山陰文化圏との結びつきが極めて強いことも分かりました。



猫橋遺跡出土木製品（加賀市教育委員会所蔵）



猫橋遺跡が発見された八日市川周辺（合河町）



柴山出村式土器

この時代の稲作は、まず泥湿地などの水田に利用しやすい土地で耕作を開始したことから始まりました。やがて灌漑技術と土木技術の向上により、河川の水を取り込むことができるようになりました。その結果、次第に河川の周辺や山間部にまで耕地が拡大し、生産力が飛躍的に向上していきました。そうした河川を制御することが可能となった地域の指導者が、やがて強大な権力をもつ

た支配者に成長したと考えられます。

## こふん 古墳時代



鋸齒文縁方格規矩四神鏡  
(分校前山1号墳)

3世紀後半から7世紀にかけての古墳時代、当地方でも多くの古墳がつくられています。古墳は、力のあった豪族ごうぞくやその一族の墓で、加賀市では、特に分校町の国道8号線付近や吸坂町から黒瀬町に至る、平地を見おろせる丘陵地などで数多く確認されています。また、片山津玉造遺跡や国指定史跡である法皇山横穴群や狐山古墳などは、全国的によく知られた古墳時代を代表する遺跡です。

分校町から松山町にかけての丘陵地には70基余りの古墳が密集しており、全体を分校松山古墳群と呼んでいます。

この古墳群は、分校前山支群ぶんぎょうまへやま、分校血墓山支群ぶんぎょうち はかやまなどに分かれています。特に分校前山支群には首長墓と推定される前方後円墳が4基確認されており、そのうちの1号墳が発掘され、棺から中国製の銅鏡で、大和朝廷が江沼の王に与えたものではないかとされる「鋸齒文縁方格規矩四神鏡」と称する当地方では最も古い鏡が発見されています。動橋川うごはしの水利権を掌握し、大和王権にも近い豪族の墳墓群と考えられます。

南郷町から吸坂町、上河崎町にかけての丘陵地には、およそ85基もの古墳が密集しており、黒瀬・南郷古墳群と呼ばれています。このうち、吸坂丸山支群すいさかまるやまし ぐんの5号墳からは、鉄製かぶと冑をはじめ、鶏形土製品や金製の耳環じ かんなど、貴重な副葬品ふくさうひんが出土しています。この古墳群には全長60mの市内最大の前方後方墳である吸坂A3号墳や、同じく全長70mを超す市内最大の前方後円墳である吸坂イカリ山13号墳など、大聖寺川水系を支配し、江沼郡全体の首長であったと考えられる豪族ふんぼの墳墓が築かれています。

市内片山津町の西側の台地では、昭和34年、35年の発掘調査により、4世紀から5世紀前半にかけての玉造職人集団が住んでいたとされる片山津玉造遺跡が発見されました。

こうした玉造遺跡は全国でもきわめて珍しい遺跡です。ここでは、33基の住居と工房を兼ねた竪穴式住居跡が発見され、首飾りなどの装飾品に使う管玉や勾玉などの玉類を製造していたと考えられています。ここで使用されていた原石の多くは緑色凝灰岩質の頁岩げつがんで、これらは動橋川の上流で採取したものと考えられています。この遺跡で作られた玉類は大和王権に送られ、さらに全国の有力豪族に配分されていました。



鶏形土製品(吸坂丸山古墳)  
(加賀市教育委員会所蔵)

一方、昭和7年に、<sup>ふたごづか</sup>二子塚町地内で、動橋川の堤防工事のために必要とする土取りをしていたところ、箱型の石棺<sup>せっかん</sup>が発見されました。調査の結果、5世紀中頃の前方後円墳だと分かりました。これが、現在、国指定史跡となっている<sup>きつねやま</sup>狐山古墳です。全長は56mあり、石棺の中からは、成人男子<sup>どうきょう</sup>の骨のほかに銅鏡「画文帯神獸鏡」や銀製帯金具、刀、短甲<sup>たんこう</sup>の他、全国的にも4例しか確認されていない、<sup>けいこう</sup>桂甲と



狐山古墳（加賀市二子塚町）

いう小さな鉄板をつづり合わせた甲冑<sup>かっちゅう</sup>などが発見されました。これらの副葬品<sup>ふくそうひん</sup>から畿内<sup>きない</sup>勢力との強い結びつきがうかがえ、この地域の統治に成功した江沼臣<sup>えぬのおみ</sup>の一族に関係する古墳ではないかと考えられています。なお、この狐山古墳のすぐ近くから、盾を持った人物<sup>じんぶつ</sup>埴輪も発見され、北陸地方では<sup>きわ</sup>極めて珍しいものとされています。これらの出土品は、現在、東京国立博物館に保管され、一部が現地の収蔵庫に残されています。

富塚町には、富塚丸山古墳と呼ぶ大きな古墳の一部が残されています。狐山古墳に続く豪族<sup>ふんぼ</sup>の墳墓<sup>ふんぼ</sup>と推定され、狐山古墳よりはるかに大きく、直径70m近くの大きさがあり、江戸時代に甲冑<sup>かっちゅう</sup>や刀剣・勾玉などの副葬品<sup>かちゅう</sup>が出土したと伝えられています。前方後円墳であった可能性もあり、もしそうであったとすれば、全長は120m以上の大きさとなり、手取川以南のこの時期では最大の古墳であったといえます。富塚に眠る王は、南加賀全体に<sup>くんにん</sup>君臨した大きな力を持つ権力者だった可能性があります。

また、勅使町では、大正11年に考古学者の上田三平により、6世紀中頃から7世紀末にかけての法皇山横穴群<sup>ほうおうざんよこあなぐん</sup>が確認され、昭和4年には国の指定史跡となりました。法皇山の麓<sup>ふもと</sup>や中腹には、現在までに80基あまりの横穴が確認されています。古くは、原始人が暮らした洞窟<sup>どうくつ</sup>だとか、宝物の隠し場所などと言われていましたが、調査の結果、古代人を埋葬した横穴墓であることが分かりました。これらの横穴の数は、詳しく調べれば、恐らく200基以上はあるだろうと考えられており、日本海側では最大級の横穴群<sup>ほうむ</sup>として知られています。この横穴に葬られた人々は、動橋川中流域に住んだ当地域の有力な一族の墓地と考えられます。

同じような横穴群は、法皇山に近い宇谷丸山にもあり、ともにこの地域に形成された凝灰岩<sup>ぎょうかいがん</sup>を掘って横穴<sup>きづ</sup>を築いています。

集落跡<sup>おおすがなみ</sup>では、弥生時代後期から古墳時代後期の大菅波A遺跡で、大量の土器が出土しています。この時代の遺跡の一か所からの出土量では県内最多となっており、相当大きな集落があったと推定<sup>すいてい</sup>されています。出土した土器の中には現在の陶器の原型となる県内



法皇山横穴群（加賀市勅使町）



大菅波A遺跡出土品  
（加賀市教育委員会所蔵）

最古の須恵器すえきも出土していて、大菅波出土の須恵器は大阪府の陶邑窯跡群すえむらかまあとから運ばれたと推定され、関西との強い結びつきが想定されています。

古墳時代には玉造りの他にも、須恵器や鉄・炭なども加賀市内で生産を始めていました。

須恵器は5世紀に朝鮮半島から伝わった焼物で、穴窯を用いて高温で焼きしめた硬い焼物です。市内分校町の分校古窯跡群ぶんぎょうこようせきぐんで、6世紀初めころの県内最古と推定される窯跡が確認されています。以後平安時代末期には陶器の加賀古陶かたに転換し、現在の九谷焼まで断続的に窯業が継承されてきたのです。

鉄生産は橋立丘陵の片野町長者屋敷遺跡ちようじゃやしきで確認されたものが県内でも最古の製鉄遺跡といわれています。橋立丘陵やますなの山砂ふくに含まれる砂鉄きてつを溶かして鉄を生産していたようで、黒崎町の「クロ」は砂鉄を現した地名で、黒瀬町も同様に製鉄遺跡が発見されています。以後、鎌倉時代ころまで継続的に生産していたようで、橋立丘陵を始めとする各所で製鉄遺跡が数多く発見されています。当時の加賀市は全国的にみても数少ない一大製鉄コンビナートであったといえそうです。

現皇室の直接先祖げんこうしつとされる継体天皇けいたいてんのう（オホドノ王）は越前の豪族でした。『日本書紀』や『上宮記』には、父ヒコウシノ王は近江高嶋の出身。母のフリヒメは越前三国、母方の祖母アナニヒメの出身地が現在の加賀市である江沼と記されていますが、これらの3地域はいずれも古墳時代には全国有数の製鉄産地であったことが分かっています。

応神天皇おうじんてんのうの子孫であったともいわれていますが、畿内に入って即位し大王おおきみとなれた背景には、こうした当時の最先端技術であった鉄生産があったと考えられています。

製鉄技術とそれによって作り出される多量の鉄の保有は、刀剣や甲冑などの武器の他、鍬くわや鋤すきなどの農具も作り出すことができ、新たな耕地拡大など生産力の向上を可能にしました。オホドノ王はこうした最新技術と、経済的優位性を背景として畿内に入り、大王（天皇）になったと考えられます。

炭生産も鉄生産に必要な燃料として、ほぼ同じ時期に生産を開始したと推定されています。鉄生産をした遺跡に近接して数多くの炭窯跡すみがまあとが確認されています。



分校古窯跡群

## 飛鳥・奈良時代

6世紀中頃に朝鮮半島より仏教が伝来し、畿内では次々と古代寺院が建立されるようになりました。江沼地方においても、有力豪族たちがこれまでの古墳に代って、氏寺を建立するようになったと考えられています。現在、この時代に建てられた寺院として、宮地、弓波、津波倉、保賀、高尾の5ヶ所から瓦や土台石など寺院跡と思われる出土物や遺構が確認されています。特に、宮地町と篠原町との間の水田の中に「じょうじゃのかま」と呼ばれる大きな石があり、宮地廃寺の塔心礎に使われた石とされています。同じく、弓波町の忌浪神社で使われている手水鉢は弓波廃寺の塔心礎に使われた石とされています。



じょうじゃのかま（加賀市宮地町）

大宝律令の制定（701年）により江沼地方は「越前国江沼郡」となりました。その後、弘仁14年（823）に加賀国が越前国より独立し、江沼郡の北半が能美郡として分立しました。新しい江沼郡内には、長江・忌浪・山背・竹原・額田・菅浪・八田・三枝の8郷また



越前国江沼郡山背郷計帳（正倉院文書）

は郡家郷を加えた9郷が置かれました。かつては江沼国の首長で、6世紀後半頃から国造の地位を世襲した江沼氏は、律令体制の中で郡司として地方行政官に位置付けられました。なお、西島遺跡は、建造物の規模や出土品などから、一般住宅とは考え難く、律令制下の郡の中心官庁である郡家もしくは有力豪族などの住居として使われたものではないかと考えられています。

この時代、国家統一の機能を確保し、中央と地方の連絡が円滑になされるために、交通路が整備されました。当地では、古代官道である「北陸道」と、その中継機関として「駅」（うまや）が設置されました。江沼郡域では、越前から加賀に入ると、先ず「朝倉駅」に、その次に「潮津駅」に出て、小松の安宅へと抜けていきました。朝倉駅は現在の橋町にあったと考えられています。

奈良東大寺の正倉院文書のなかに、天平12年（740）の「越前国江沼郡山背郷計帳」の一部が残っています。計帳とは、戸籍と並ぶ律令制の基本帳簿で、人民から税をとるための台帳として作成されました。特に、山背郷計帳は、北陸道に関する唯一の籍帳（戸籍と計帳）であり、江沼臣族の一族を家族単位でリスト化したもので、氏名や家族関係、その人の特徴までも記録されておりとても興味深いものです。

このほか、正倉院文書の中には、税として収める稲や粃の比率などを記載した「越前国

しょうげいちょう や「越前国郡稻帳」なども残されており、これらの文書は、当地域の社会構造を知るうえに貴重な資料となっています。

## 平安時代

平安時代に入ると仏教がますます盛んになり、古来よりの白山信仰が、仏教思想と結びつきました。当地域では、柏野寺、温泉寺、極楽寺、小野坂寺、大聖寺の五つの寺院が「白山五院」と呼ばれ、白山信仰の拠点地として建立されたことが平安後期の書『白山之記』に記載されています。この5つの寺院のうち、温泉寺は現在の山代温泉薬王院だとされています。また、極楽寺は大聖寺畑町に、大聖寺は現在の錦城山から荻生町にかけての山の上にあった寺院と考えられています。このほか、「白山三箇寺」として那谷寺（小松市那谷町）、温谷寺（加賀市宇谷町）、栄谷寺（加賀市栄谷町）があり、この頃、当地方は白山信仰の中心地となっていたことをうかがい知ることができます。

現在、山代温泉薬王院に安置されている「木造十一面観音像」は、もと大聖寺慈光院の本尊として祀られていましたが、関ヶ原の戦いの折、大聖寺城主山口玄蕃頭が前田利長に攻め滅ぼされた際に、池の中に投げ入れられ難を逃れたと伝えられています。明治維新後、同じ白山五院のひとつであった薬王院に移されたものです。平安時代末期の白山信仰の本地仏として貴重な仏像であり、現在、石川県の有形文化財に指定されています。

また、律令体制下で江沼郡を代表する有名な地方豪族の地位を保っていた江沼氏は、平安時代に入ると、郡司層の中に現れなくなりました。平安前期には京都の下級貴族、中期になると下級役人としてその名が見えることから、江沼氏の本流は平安時代になってから地元を離れて京都に移り、結局は下級役人になってしまったようです。その江沼氏に代わり、後期になって新しく台頭した豪族は、土着した国司の末裔である大江氏でした。このように古代から中世への移行期に、在地における有力土豪として勢力を伸ばしたのは、

大江氏のような外来勢力でした。

寛治4年（1090）に加賀守であった藤原為房が、加賀国府から淡津泊（竹の浦泊あたりか）を中継点として敦賀津へ向かった記録があり（『為房卿記』）、当時の貴族たちが、京と加賀国の往来に船運を利用していたことが分かります。中世後期の江沼郡の流通路は、額田十日市や八日市、七日市などの莊園市場を繋ぐ内陸の横軸と、日本海沿岸の



木造十一面観音像  
（山代温泉薬王院）



大聖寺川河口「竹ノ浦」付近

あ たかみなと たけ の うらのとまり たてじく  
安宅湊や竹ノ浦泊を繋ぐ河川を通じた縦軸をもっていたといえます。

# [中世編]

鎌倉・室町・戦国時代

## 鎌倉・室町・戦国時代

## 源平合戦と実盛伝承

平安時代、都では、藤原氏をはじめとした貴族が朝廷の重要な役職をひとりじめにして、絶大な権力をもっていました。やがて地方の荘園を管理する郡司や豪族たちは、自分たちの土地を守るために武装し、武士団としての力をもつようになりました。その代表が清和天皇の子孫にあたる源氏と、桓武天皇の子孫にあたる平氏の2大勢力でした。



首洗池（加賀市手塚町）

特に、平安時代末期になると、平清盛は、藤原氏に代わって朝廷を動かすほどの力を持ち、ついには「平氏でなければ人でなし」と言われるほどになりました。しかし、平氏の目にあまる横暴は、ほかの貴族や武士たちの反感を買い、各地にひそんでいた源頼朝や弟の源義経、従弟の木曾義仲らを中心とした源氏が挙兵する原因ともなりました。

た。寿永2年（1183）に平家軍は、越中の倶利伽羅で木曾義仲に大敗し、加賀国篠原（現在の加賀市篠原町あたり）まで逃れてきました。この地で、平家の武将、齊藤実盛は、義仲の家来、手塚太郎光盛に討ち取られました。戦いのあと、義仲が、老武者の髪が黒々としているのを不思議に思い、近くの池でその首を洗わせたところ、白髪まじりの実盛の姿があらわれてきました。義仲にとって、実盛は、幼いときに平氏から命を救ってくれた恩人だったのです。実盛は老武者と思われることを嫌い、白髪を黒く染めて参戦していたのでした。

この実盛の首を洗ったと伝える池が「首洗池」（加賀市手塚町）で、その霊を鎮めるために築いた塚と伝えられるところが「実盛塚」（加賀市篠原新町）なのです。さらに、実盛が白髪を染めるときに使用した鏡を投げ入れたと伝える池が深田町の「鏡の池」です。



義仲・実盛対面の像（首洗池）

## とうごくご けにん 東国御家人と在地領主

源 頼朝みなもと の よりともによって建久3年(1192)に鎌倉幕府かまくらばくふが成立し、その將軍の家臣を御家人ご けにんとい  
います。御家人はほとんどが関東の武士でした。この鎌倉の武家政権は、支配下の地域に  
守護しゅごと地頭じとうを設置し、これに御家人を任命してその地域の武士と土地を管理させ、勢力圏  
の維持・拡大に努めました。特に、承久3年(1221)5月に後鳥羽上皇の幕府打倒の企て  
が失敗に終わった「承久の変」の後、幕府が没収した朝廷方の土地にも新補地頭しんぼが置かれ  
ると、各地で多くの御家人が地頭となり、任じられた土地に土着して地頭の職せしゅうを世襲する  
ようになりました。

こうして江沼郡に入った外来の地頭の一人、熊坂庄くまさかのしょうの地頭職を領有した大見実泰おお み さねやすは、  
文永10年(1273)、この庄の当時の領家であった公家の徳大寺家の預所あずかりどころ(現地管理者)  
と争い、とうとう領家と地頭とで土地を折半するという条件で示談とし、半分を自分の領  
地としてしまいました。これを「和与中分」といいます。この大見氏も伊豆国出身の御家  
人でした。このように、御家人たちの行動は、莊園を領有する公家  
や寺社の権利を侵害するばかりでなく、在来の小領主であった武  
士たちが持つ既得権をも奪かし、その結果として、江沼郡の土豪  
から平安時代末以来の武士は姿を消し、鎌倉時代から南北朝時代  
にかけては、代わって東国御家人の外来地頭とその一族が占めるよ  
うになりました。



源頼朝

そのような東国御家人の外来地頭の典型が狩野氏です。狩野氏  
は伊豆国を本拠とする狩野氏の一族と思われませんが、13世紀半ば  
以降、福田庄地頭として登場し、やがて庄内の菅生社の領有権をも  
入手するようになり、江沼郡で最も有力な国人(土豪)にまで成長しました。

## なかせんだい か の 中先代の乱と狩野一党

南北朝の動乱が始まる元弘3年(1333)6月、福田庄菅浪郷総領地頭・菅生社神主の  
狩野頼広かの よりひろが能美郡の国人らと共に、倒幕運動を展開中の足利高氏  
(尊氏)に参陣して新政府に属する態度を明確にしました。しかし、  
新政府は全国の領主や民衆の期待に応える政権でなかったため、  
各地で建武政権に対する反乱がおり、その最大の反乱が、建武2  
年(1335)7月、北条高時の子の時行を擁立した北条一門の残党の  
鎌倉占領でした。高時以前の北条氏の治世を先代、足利氏を後代、  
時行を中先代と称したので、これを「中先代の乱」といいます。こ  
の反乱に呼応して、越中の前守護名越時なごえとき有の子の時兼ときかねが越中・加  
賀・能登の軍勢を集め、京都を攻めようと南下した際、「大聖寺ノ



足利尊氏

城」に楯籠もる敷地伊豆守・山岸新左衛門・上木平九郎らが、越前からの援軍を得て時兼軍を阻止し、潰滅させました。これらはいずれも狩野氏の一族で、敷地（敷地町）・山岸（下福田町）・上木（上木町）を本拠とする小領主として狩野一党を形成していたのです。

建武3年（1336）、建武政権が崩壊して南北朝の動乱期となり、反尊氏派の新田義貞が越前に入ると、義貞と結んだ畑時能が狩野一党を味方に入れました。彼らは越前の細呂木に堡壘を構えて「大聖寺ノ城」に楯籠もる尊氏方の津葉清文を攻め落とし、さらに新田軍に加わり尊氏方の越前守護斯波高経の拠点である越前の府中（越前市武生）を攻めるなど、内乱当初において、狩野一党は後醍醐天皇方として活躍していました。しかし、暦応元年（1338）に新田義貞が越前藤島で戦死して以降は、尊氏の室町幕府に属するようになりました。

こうして狩野一党は、内乱中期から後期を通じて、室町幕府に属しましたが、それは加賀の守護富樫氏の支配下に属するというのではなく、直接、室町將軍家から所領の安堵（保証）を受ける將軍直参の奉公衆として、室町將軍の直轄軍団に加わったものでした。その後も狩野一党は江沼郡最大の武士団としての立場を保持しましたが、やがて一向一揆の嵐の中に埋没してしまいました。



新田義貞像  
（丸岡町称念寺蔵）

## どごう しょうえん 土豪の荘園侵略



菅原道真

ところで、古代では公地公民が原則で、土地の私有は認められていませんでしたが、中央政府の力が衰えるにつれて、公地主義を維持することが次第に困難となって、まず特定の貴族や寺社などの勢力が、次いで中小の豪族などが土地の私有化を図るようになりました。この傾向は平安時代に入るとさらに強まり、中期以後は私有化された土地が全国に現れました。こうした私有地を総称して荘園郷保といいますが、「郷」とは古代の行政区画の郷とは異なり、荘園化されずに国家の管理権がまだ維持されていた公領（国衙領）が私領となった土地を、また、「保」とは郷から分かれて独立の領域となった土地を指します。こうした荘や郷が江沼郡では、平安末期の大治2年（1127）までに、菅浪郷・山代郷・南郷・諸田郷（額田郷か）と額田庄が、安元2年（1176）までに熊坂庄ができました。この勢いは鎌倉時代以降にさらに進み、福田庄・富墓庄・奈多庄が、南北朝時代に山代庄南郷、室町時代中期には横北郷・忌浪郷が現れました。

福田庄・山代庄本郷・富墓庄は、京都の菅原道真を祀る北野天満宮の社領で、北野宮寺領と呼ばれましたが、加賀国には7ヶ所、このうち江沼郡には3ヶ所も集中していました。現在、加賀市内には菅原道真を祀る菅原神社が多数鎮座しているのは、このことと深

く関連があると思われます。その中核が福田庄で、庄内の  
そうちんじゆ すごうしや すごうてんじん  
 総鎮守である菅生社に天満宮の分霊を祀り、菅生天神と称  
 されましたが、荘園支配の実権は地頭狩野氏にぎに握られてし  
 まいました。

南北朝時代以後、やましろのしょう山代庄は山代本郷・南郷・忌浪郷の3  
 郷で構成されていましたが、これらが常に北野宮寺領であ  
 ったわけではなく、公家のそのけ園家、守護の富樫氏、地元の武  
 士などによって争われ、各郷ともに複雑な分割領有の状態となつて室町時代末期の一向  
 一揆の時代を迎えることになりました。富墓庄も同様に室町時代中期には宮寺領とは名  
 目だけで、地元の武士しんがいに侵害され、わずかに菅原道真こうえいの後裔の高辻家がけんえき権益の一部を保つ  
 だけになっていました。



北野天満宮（京都市）

このように、本所・領家と呼ばれるしょうえんりやうしゆ荘園領主の貴族や寺社は、現地に管理者を派遣する  
 か、地元の有力な国人こくじん（土豪）どごうに管理を委ねましたが、それに伴う権益をめぐる、当然  
 ながら地元の管理者との間に争いが起こってきました。特に15世紀末、一向宗が盛んいっこうしゅうに  
 になると、多くの国人が門徒化して百姓と一体となり、必ずしも荘園領主が要望する年貢納  
 入こたに  
 応えなくなりました。さらに一向一揆が激化する中で、各村落で「村殿」といわれる  
 小土豪が小領主として成長し、こうした小領主によって、荘園は名ばかりのものとなって  
 いきました。

## 貴族の下国げこく

そうした中で、現地に留まって直接荘園支配に努める領主も現れました。富墓庄では  
たかつじつぐなが ぶんめい ふじわらほっけ そのもととみ もとくに  
 高辻継長が文明5年（1473）から3年間、弓浪郷では藤原北家の流れの園基富・基国父子  
ぬかだのしょう やたのしょう むらかみげんじ  
 が文明18年（1486）から2代にわたり30余年間、さらに、額田庄・八田庄では村上源氏  
なかのいんみちよ みちたね みちため ぶんき  
 の流れをくむ中院通世・通胤・通為父子が文亀元年（1501）頃から3代にわたって約65  
 年間、一向一揆が激化する中で、それぞれ家領の維持を図るため、京都を離れて現地に下  
 向し、直接経営にあたっています。このように京都の上級貴族が長期にわたって地元勢力  
 の侵入を防いで、荘園支配に努力しなければ、荘園からの権益が確保できない状況になっ  
 ていました。

## 時宗と実盛供養くよう

鎌倉新仏教のうち、最初に江沼の地へ進出したのは、一遍智真いっぺんちしんが開いた時宗じしゅうでした。  
 一遍は念仏の札くぼを賦めぐりながら全国各地を巡りました。これを遊行ゆぎょうといいます。しかし、一  
 遍は北陸に足を踏み入れることなく亡くなりましたが、跡を継いだ2世遊行上人しんきやう真教は  
しょうおう  
 正応4年（1291）8月、加賀へ遊行し、これが江沼の民衆が念仏に接した最初となりました  
 た。遊行に際して結縁けちえん（人々が仏法に触れること）した人々を時衆じしゅうと呼びますが、この時

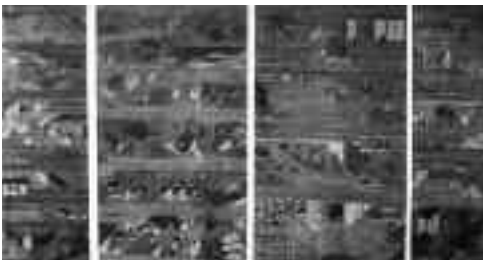
衆は、南北朝時代以降、柴山・林・額田・大聖寺などの海岸寄り一帯に広がり、潮津の西光寺がその中心となりました。そのような時宗最盛期の応永21年(1414)3月、14世遊行上人太空が潮津で法要を開いた時、源平争乱の篠原の戦いで討ち死にした斎藤実盛の霊があらわれ、太空はこの怨霊を懇ろに供養し鎮魂したといえます。この話をもとに世阿弥が謡曲「実盛」を著しました。以降、歴代の遊行上人は加賀に至ると、必ず実盛塚に詣でて回向するのが重要な行事となり、今日までこの例は堅く守られています。しかし、この地の時衆は、一向宗と呼ばれた浄土真宗が盛んになる戦国時代に入ると、ほとんど姿を消しました。



実盛塚(加賀市篠原新町)

時宗に次いで念仏の教えを広めたのは親鸞を開祖と仰ぐ浄土真宗でしたが、最初に真宗の念仏を江沼に伝えたのは本願寺の系列ではなく、親鸞に教化された関東の門徒たちが直弟子の真仏を中心に結集した高田派でした。この法系を引く三河門徒団が、尾張・美濃を経て越前大野郡に進出しました。その中心人物が越前大野に専修寺を開いた如道で、この越前に展開した門徒団を総称して三門徒派といい、室町初期までに越前で強い勢力をもつようになりました。やがて江沼郡にも教線をのばし、その分派が江沼に移って、後の月津の興宗寺、小松の本覚寺、山代の専光寺となりますが、これらの諸寺はいずれも本願寺8世蓮如の布教後に転派し、本願寺派となっていました。

このように優勢な三門徒・高田派系に囲まれて、荻生願成寺・河崎専称寺・打越勝光寺などの数少ない本願寺派の寺院は孤立した存在となっていました。このうち荻生願成寺は、現在、大聖寺願成寺が所蔵する『親鸞絵伝』の裏書に応永26年(1419)とあり、全国的にみて最古のものであることから、15世紀初頭には本願寺派の寺院として成立し



専称寺所蔵「親鸞絵伝」(加賀市大聖寺鉄砲町)

ていたと思われます。また、これらが本願寺系として勢力を拡大していくのは、本願寺7世存如が宝徳元年(1449)に河崎専称寺へ『親鸞絵伝』を下し、蓮如を伴って越前から加賀に入り、布教活動を開始してからのことで、それ以降、高田派と本願寺派は加賀・越前において激烈な抗争に入っていくことになります。

## 蓮如と吉崎道場

文明3年(1471)7月、本願寺8世蓮如が加賀・越前の国境、吉崎に道場を開きました。当時、蓮如は比叡山延暦寺衆徒に追われ、近江(滋賀県)を転々としていましたが、ついには北陸にまで避難するかたちで、吉崎に拠点を決めました。以後、三門徒派・高田派を秘事法門と批判して退け、その派の諸寺や門徒の本願寺派への吸収を図るとともに、盛ん

に御文おふみを發して農民層を中心に精力的に布教しました。その結果、吉崎御坊よしざきごぼうにはまたたく間に多くの参詣者さんけいしやがつめかけるようになり、吉崎はいちやく仏教都市になりました。

こうして、北陸一円では蓮如上人のもとで浄土真宗が急速に広まっていきましたが、その背景として浄土真宗の本尊おおんじがみねが白山大汝峰れんにょしょうにんの本地仏である阿弥陀如来あみだにょらいであったことが考えられます。白山信仰や浄土真宗は、近世以降も引き継がれ、現在も市内の神社の5割弱で白山神を祀り、また、寺院では浄土真宗が8割を上回るなど、白山信仰と浄土真宗は、当地の信仰心かの核かくとなっています。

その頃、加賀の守護職しゅごしきをめぐる富樫政親とがしまさちかと弟の幸千代こうちよが争っていましたが、蓮如が吉崎に進出した頃は、幸千代が優勢で、政親は文明5年(1473)に越前に逃げる状況でした。



蓮如像 (吉崎寺)

幸千代側の勢力は土豪層の武士と高田派が中心で、本願寺派が吉崎を拠点にして加賀に勢力を伸ばす状勢を打破しようとしていました。これに着目した政親が本願寺門徒と手を結び、文明6年に越前から加賀に打ち入り、幸千代の能美郡蓮台寺城の み ぐんれんたい じじょう おとを陥して守護職だっかんに成功しました。ところが、本願寺門徒の協力で勝利を得たにもかかわらず、守護富樫政親は門徒を弾圧する方針をとるようになると、文明7年(1475)3月、門徒は蜂起し政親と対決しました。この後、敗北して越中へ追い散らされ、吉崎も反政親派の拠点として政親の圧力をうけることになり、結局、蓮如は、同年8月吉崎を退去しました。

## 文明・長享の一揆

しかし、本願寺派の進出は、守護や土豪などの領主層の支配から離れようとしつつある農民層を門徒化していった結果、一向衆として農民層の団結そんらくじちが強まり、村落自治を成立させました。こうした農村内部の変化によって、国人や地侍と呼ばれる村殿層の中小在土豪たちは、門徒化した惣百姓そうひやくしやうと協調するために自身も門徒化し、惣百姓の要求を組織化することによって勢力の維持を図るようになりました。その結果、在地を支配する一向衆と、一向衆を打倒しようとする守護勢力との抗争が深まっていき、ついに長享2年(1488)春、この状況を危機とみた富樫政親が、将軍に従って出陣していた近江から急いで帰国し、居城高尾城の防御を固めると、一向一揆は加賀の各地で蜂起し、高尾城を包圍して落城させ、6月に政親を自害させました。この時、越前守護朝倉氏の富樫への援軍も、福田・敷地などに陣を構えていた一揆軍に



吉崎御坊 (福井県あわら市)



富樫館跡石碑 (野々市市)

やぶ むな  
破られ、空しく引き上げました。この文明・長享の一向一揆の勝利によって、約1世紀の間、加賀に「百姓の持ちたる国」が成立しました。

## あさくらし えいしょういっ き 朝倉氏と永正一揆

しかし、それ以降も加越国境では、一揆軍と朝倉軍の戦闘は続き、永正元年(1504)頃から畿内を中心に北陸・東海地方の一向一揆が一斉に蜂起して戦国大名と対決する事態となりました。この動きに呼応して、永正3年(1506)7月、加賀一向一揆も大挙して越前へ攻めこみました。この永正一揆は当初、一揆方が優勢で、たちまち九頭竜川以北を占領しましたが、九頭竜川畔の戦いで朝倉軍に惨敗し、3分の2の兵力を失って加賀へ逃げ帰りました。この時、江沼の一揆軍を率いたのは、黒瀬を本拠とする黒瀬覚道らの大土豪でした。



一乗谷朝倉遺跡(福井市城戸ノ内町)

この大敗北によって、越前では本願寺勢力が一掃されました。吉崎道場は完全に破壊され、有力寺院である藤島の超勝寺や和田の本覚寺なども破却され、加賀に亡命せざるを得ませんでした。本覚寺は能美郡の和田山に移り、超勝寺は江沼郡東北部に居を構えました。現在、林・ニッ梨・塔尾にそれぞれ超勝寺跡と伝えられる遺跡があります。

## かしゅうさん か じ 加州三ヶ寺体制の支配

ところで、蓮如が吉崎に進出する以前に、河北郡二俣の本泉寺を蓮如の次男蓮乗が嗣ぎ、3男蓮綱は能美郡波佐谷の松岡寺を開いていました。そして、江沼郡の山田に山田坊が開創され、そこに文明18年(1486)頃に蓮如の4男蓮誓が江沼郡の門徒から取り立てられて入り、光教寺と号することになりました。この蓮如の子が住持する寺を「加州三ヶ寺」、蓮乗・蓮綱・蓮誓の3兄弟を「三山の坊主」といいます。蓮如の後を継いだ本願寺9世実如は5男で、この三ヶ寺は加賀で本願寺と最も血縁の濃い一門でしたから、長享一揆以降、加賀の一向一揆はこの三ヶ寺によって統制される、いわゆる「加州三ヶ寺体制」がしかれました。



蓮如像(加賀市山田町)

## きょうろく さくらん 享禄の錯乱と本願寺支配

しかし、実如の跡を継いだ本願寺10世証如の時代になると、次第に門徒百姓は在地の大寺院の支配から離れて直接本願寺に結びつく、直参門徒になる志望を強めるようになりました。こうした門徒の動向を察した本願寺は、越前帰還を望み三ヶ寺と対抗関係にあった超勝寺との連携を深め、反三ヶ寺体制の姿勢を示すようになりました。これに対し

享禄4年(1531)、三ヶ寺派は実力行動で超勝寺を討つことを決定しましたが、超勝寺一党が攻撃に出て波佐谷の松岡寺を滅ぼし、次いで二俣から移っていた若松の本泉寺を焼き払いました。さらに超勝寺一党は江沼郡に攻め込みました。光教寺では父蓮誓の跡を嗣いだ顕誓を中心に、黒瀬覚道・福田ノ竹太夫・柴山・一針らの有力国人らが越前朝倉の援軍を得て戦いましたが破れて退却、越前に逃れました。この事件を「享禄の錯乱」といいます。ここに大坊主と有力国人が主導権を持つ「加州三ヶ寺体制」は消滅し、名実ともに本願寺直参衆を中心とした本願寺王国が出現したのです。



光教寺土塁跡(加賀市山田町)

こうした門徒たちにとって、真宗布教の基本であり、発展の原動力となったのが、集まって念仏し法談する「講」でした。蓮如の吉崎進出以降、各村々に多くの講が生まれ、それらを総括する江沼郡全体の講として、「六日講」ができました。この講は門徒の信仰を固めるという基礎的役割を果たすだけでなく、法主の教化に対する報恩の志、すなわち懇志(寺に納める銭や米)を集める場でもあり、「六日講」の懇志は本願寺に納められ、そこを支える経済的基盤の機能も併せもったものでした。

また、一向一揆には組と呼ばれる軍事組織がありました。組を構成するのは、同一地域の国人・土豪や有力農民などで、代表は組の寄合で選びました。それを「旗本」といいます。本願寺はこの旗本を通じて統制し、その機能は組内の課税や裁判を含む行政権、本願寺の警備などでした。江沼郡にはどの程度の組が存在したのかは分かっていませんが、大聖寺川下流域を区域とする「菅生組」があったことが分かっています。

このように一向一揆の支配体系は、形式的には本願寺を頂点とし組・講を基礎とする法王国ですが、構造的には組・講を構成する主要素の有力百姓、いわゆる中世の百姓に基礎をおくものでした。

## 朝倉宗滴の江沼侵略

本願寺では実如の晩年に越前の朝倉氏との間で和睦が成立していましたが、共に戦国大名への道を邁進していた両者の共存は許されなく、加越国境の平和も永くは続きませんでした。

証如の跡に11世顕如が本願寺法主となると、弘治元年(1555)、越前の朝倉宗滴が一向一揆を潰滅させようと、加賀へ大挙して侵入し、ここに再び、以後10余年にわたる加越抗争が始まりました。南郷城の黒瀬掃部丞・藤丸新介、作見千足城の大坂・瀧山津大助・振橋帯刀らが率いる江沼郡の一揆勢は総力をあげて大聖寺から南郷の辺りで朝倉勢の進撃を阻止しようとしていました。しかし、防ぎきれずに津葉城や南郷城を捨てて退却した一揆勢は、加賀4郡の総力を結集して反撃に出ました。ところが、再度敗北し、江沼郡



金吾ヶ城「江沼郡古城跡図」

の一揆の運命は<sup>ふうぜん ともしび</sup>風前の燈となりましたが、<sup>きんご がじょう</sup>敷地の金吾ヶ城に本陣を構えていた総大将朝倉宗滴が発病し、朝倉勢が越前に引き上げたので事なきを得ました。

その後も一向一揆と朝倉氏の抗争は続きましたが、永禄10年（1567）、越前<sup>いちじょうだに あさくらやかた</sup>一乗谷の朝倉館に身を寄せていた<sup>あしかがよしあき わぼく</sup>足利義昭の仲介でようやく和睦が成立し、その結果、江沼郡の一揆方の拠点であった<sup>かしの まつやま</sup>柏野・松山両城と、朝倉氏の管理下に置かれていた<sup>くろたに ひのや</sup>黒谷・檜屋（日谷）・大聖寺の3城が破却され、北陸道の封鎖も解かれることになりました。

いっこういっき

### 一向一揆の終わりと織田軍の進出

天正3年（1575）<sup>ながしの</sup>長篠の合戦で武田軍を破った<sup>おだのぶなが</sup>織田信長は、北陸を平定するために越前に侵入しました。<sup>はしばひでよし に わながひで しばたかついえ せんぼう</sup>羽柴秀吉や丹羽長秀、柴田勝家らの織田軍の先鋒は、ついには加賀へ討ち入り、大聖寺、敷地、山中の各城を攻め落とし、江沼郡を占領しました。その後、能美の一揆勢も破って手取川まで進出しました。ここに、江沼・能美の両郡は、百年近くに及んだ一向一揆と本願寺配下から離され、新たに織田信長の占領下に入ることとなりました。

このあと、信長は北陸総司令官として柴田勝家<sup>えちぜんきたのしょう</sup>を越前北庄（現在の福井市）に置き、江沼地域の拠点であった大聖寺城には、天正4年<sup>べっきょう こんひろまさ</sup>に戸次右近広正が、天正8年（1580）には柴田勝家の家来、<sup>はいごう</sup>拝郷<sup>ござ えもんいえよし</sup>五左衛門家嘉が城主となって当地を治めました。



柴田勝家

# [近世編]

江戸時代

## 江戸時代

## 大聖寺城主 溝口秀勝の時代

各地の一向一揆を打ち破り、天下統一を目前としていた信長は、天正10年(1582)に本能寺の変で明智光秀に討たれ、あえない最後を遂げました。信長の跡を争ったのが、羽柴秀吉と柴田勝家の2人でした。翌天正11年、秀吉は賤ヶ岳の戦い(滋賀県)で柴田軍を破り、勝家は北庄(福井市)に逃げましたが、ついには兵火の中で命を絶ちました。

この戦いにより、秀吉は前田利家に石川・河北の2郡を与え、丹羽長秀を北庄に置き、越前・若狭の両国と江沼・能美の2郡を統治させました。これにより、江沼郡では、長秀の与力、溝口秀勝



溝口秀勝

が、4万4000石の領主として大聖寺城に入り当地を治めることになりました。秀勝が江沼郡を支配した期間は約15年ほどですが、大聖寺城下町(本町・京町・魚町)の基本的な形は、この時期につくられました。慶長3年(1598)4月、北庄の堀秀政(長秀の後任)の子秀治が越後(新潟県)の春日山に移されると、秀勝は同国の新発田に移りました。この移動は、同年正月の上杉景勝の会津(福島県)移動に伴うものでした。秀吉は秀勝の新発田移動に際し、本百姓を除く、家臣・仲間・小者・下人・奉公人に至るまですべて越後に連れて行くように命じました。新発田市に現存する資料には、本百姓を含む多くの農民が大聖寺から新発田に移住し、多くの村が成立したとあります。

## 山口玄蕃頭宗永と大聖寺合戦

堀秀治の春日山移動により、秀吉の家来で、筑前・筑後(福岡県)の領主、小早川秀秋が北庄に入り、江沼郡も支配することになりました。大聖寺城には秀秋の家来、山口玄蕃頭宗永が入り、江沼郡7万石の支配者として当地を治めました。この時、宗永は秀秋の家臣から秀吉の直臣に転じました。宗永は山城(京都府)の出身で、筑前・筑後の検地を実施するなど、理財の道に優れていました。また、千利休に茶の湯を学び、博多の年寄衆や毛利輝元・小早川隆景などとも茶会を開き、能楽にも通ずる当時の文化人でした。

慶長3年(1598)8月に豊臣秀吉が死去すると、政局は大きく動きました。豊臣家を守

ろうとする石田三成を中心とする勢力と、徳川家康を新たなリーダーにしようとする勢力の2つに分かれていったのです。慶長5年(1600)7月に家康を筆頭とする東軍と、毛利輝元を総大将にたてて参戦した三成を筆頭とする西軍との間に戦いがありました。これが関ヶ原の戦いです。戦いは西軍の小早川秀秋の裏切りなどもあり、東軍、家康側の勝利となりました。



山口玄蕃頭首塚(大聖寺新町)

関ヶ原の戦いにより、当地でも東軍と西軍で戦いがありました。大聖寺城主山口玄蕃は西軍に、金沢城主前田利長は、家康側の東軍についたため、同年7月、前田利長率いる2万5千人の大軍が大聖寺城に攻め込みました。この戦いで1200人余の山口軍は、僅か1日で敗戦して、およそ800人の家臣が討ち死しました。山口玄蕃頭宗永の首塚は大聖寺



四つ墓(大聖寺地方町)

新町の福田橋詰にあり、現在でも玄蕃頭親子が自決した日と伝えられる8月8日には、供養の法要が開かれています。全昌寺の境内には松江市(島根県)在住の山口氏の末裔が明治23年(1890)に立てた石碑が、荻生町外れの錦城山下には前田家が玄蕃を供養するために立てたと伝える年代不詳の荻生地蔵があります。なお、利長勢の中で、鐘ヶ丸の戦いで戦死した長連龍の家臣の墓「四墓」が、錦城中学校前の宅地の中にあります。

## 前田利長の江沼郡支配

加賀藩2代藩主前田利長は、関ヶ原の戦いで豊臣方の大聖寺城主山口玄蕃頭宗永を攻め滅ぼしたことで、徳川家康から、それまでの領地に加え、能美郡8万石、石川郡(松任)4万石、江沼郡7万石が新たに与えられました。ここに、加賀・能登・越中3ヶ国に119万石を領有する加賀藩が成立しました。これ以後、寛永16年(1639)に大聖寺藩が成立するまで、金沢から派遣された太田長知や小塚権太夫などの城代(のち郡奉行)が江沼郡を支配しました。初代城代の太田長知は、慶長7年(1602)5月に利長の命で横山長知によって金沢城で斬殺されました。なお、大聖寺城は元和元年(1615)の一国一城令で廃城となり、本丸・二の丸・鐘ヶ丸などの名称や僅かな土塁を残すのみとなりました。加賀藩の治世の中で、最も注目された事業は市之瀬用水の着工でした。2代利長は寛永2年(1625)に久世徳左衛門に命じ、別所村から山代新村に至る用水を完成させました。3代利常は同6年に山代神明宮(市之瀬神社)を鎮守とし、社地・神領を寄進するとともに徳左衛門を神官に任命しました。

## 大聖寺藩の成立



前田利常像  
(小松市丸の内公園)

加賀藩3代藩主前田利常<sup>としつね</sup>は、寛永16年(1639)に長男光高<sup>みつたか</sup>(4代)に藩主を譲り、小松に隠居<sup>いんきょ</sup>しました。この時、2男利次<sup>としつぐ</sup>に富山藩10万石を、3男利治<sup>としはる</sup>に大聖寺藩7万石を分け、支藩として独立させました。そのため、それまで119万石をもっていた加賀藩は、光高の80万石と利常の養老領<sup>ようろうりょう</sup>22万石を合わせて102万石となりました。利治が得た7万石とは、江沼郡133ヶ村分6万5731石余と、越中新川郡9ヶ村分4300石余の合計で、江沼郡の那谷村は利常の養老領として除外されました。2代利明<sup>まんじ</sup>は、万治3年(1660)8月に新川郡9ヶ村と能美郡6ヶ村(馬場・島・串・日末・松崎・佐美村、4302石余)を交換しました。利治の母は2代将軍徳川秀忠<sup>ひでただ</sup>の二女珠姫<sup>たまひめ</sup>で、法号を天徳院<sup>てんとくいん</sup>といたしました。天徳院は大聖寺藩の成立前、元和5年(1619)に敷地天神社<sup>ごしんぼう</sup>に御神宝<sup>おかげのたまご</sup>や御神楽代<sup>おかげのしろしろ</sup>を寄進しています。ともあれ、寛永16年の大聖寺藩成立により、当地は明治維新を迎える14代藩主利啓<sup>としか</sup>までの230年間にわたって前田家により支配されることになりました。

藩祖利治<sup>はんそとしはる</sup>は大聖寺藩の政治の仕組みを整え、九谷や熊坂に金山を、曾宇に銀山を開発しました。また、木地師の保護や九谷焼の製造など、殖産興業にも力を注ぎ、大聖寺城下町の基礎を築きました。ついで、2代利明は市之瀬用水の大改修、新川<sup>かいさく</sup>の開鑿<sup>かし</sup>、榿・竹の植栽、茶の栽培<sup>りゅうこつしゃ</sup>、流骨車の導入<sup>じしゅう</sup>、時鐘<sup>ちゅうぞう</sup>の鑄造などを行いました。このように、大聖寺藩の基礎は藩祖利治と2代利明によって築かれました。



大聖寺藩邸園(「錦城名所」より)

藩祖利治は廃城となった大聖寺城に代わり、大聖寺川・熊坂川を堀として、錦城山<sup>ふもと</sup>の麓に藩邸<sup>はっけんみち</sup>を建てました。城下町では馬場町・八間道付近に上級の武士を、仲町・鷹匠町<sup>たかじょう</sup>・耳聞山<sup>みみきやま</sup>付近に上中級の武士を、鉄砲町・弓町・金子・木呂場などに下級武士や職人を住まわせるなど、身分や職業により居住場所を分けました。また、寛永・正保年間には城下の整備に伴い意図的に浄土真宗以外の禅・浄土・日蓮各宗の寺院を山ノ下に集めました。

商品流通の発展に伴い、周辺の農村部から人口が流入し、藩政期を通じて町域は徐々に拡大しました。城下町には、塩・茶・絹・紙をはじめとする問屋<sup>よしだや</sup>が置かれ、吉田屋<sup>ふくだ</sup>や福田屋<sup>はしたて</sup>をはじめとする有力町人が育ち、橋立<sup>せごえ</sup>や瀬越<sup>きたまえんしゅ</sup>の北前船主とともに、豊かな経済力によって藩財政を支えました。

## はいづか 灰塚論争と3人の殉死者 じゆんししゃ



前田利治公灰塚 (大聖寺岡町)

これまで藩祖利治の死去をめぐり、大聖寺の国元に運ばれたのは、利治の遺骸か遺骨かの長い論争(灰塚論争)がありました。『大聖寺藩史』では、本文中で遺骸説をとっているものの、備考において遺骨説も否定しえないと明記しています。諸藩の藩主が江戸で死去した場合には、すべて遺骸が国元に運ばれているので、藩祖利治も遺骸で大聖寺そうえいじに運ばれ、岡村の宗永寺(のち実性院と改名、前田家の菩提寺)で葬儀を行ったようです。現在も大聖寺岡町には、藩祖利治の遺骸を茶毘だびに付し遺骨を仮安置したという灰塚があります。

藩祖利治の死去に際し、家臣なかざわきゆうべえの中沢久兵衛(35歳)・小沢三郎兵衛(49歳)・小栗権三郎(22歳)の3人が殉死(追腹)しました。小沢は信州(長野県)善光寺に隣接した寛慶寺で、小栗は大聖寺の久法寺で、中沢は全昌寺でそれぞれ自害しました。彼らの墓は、いままも藩祖利治の墓の後方に立てられています。なお、藩祖利治から寵愛されながら殉死しなかった青山新右衛門あおやましんえもんの墓は、墓地より低い石段の近くに立てられています。

## 支配機構と歴代藩主

藩の職制には御用所ごようしょや御算用場ごさんようばをはじめ、町役所おこおりしょ・御郡所ごんみしょ・寺社所さくじ・吟味所ぎんみしょ・作事所さくじ・割場わりばなどがありました。御用所は藩政一般を司る役所で、家老と御用人から組織されました。御算用場は出納や禄米などを司る役所で、御算用場奉行と勘定頭が管轄し、元締役が補佐しました。金銀小払役きんぎんこばいやく・御貨物奉行おかしものぶぎょう・銭手形奉行ぜにてがたぶぎょう・御収納奉行ごしゅうのうぶぎょう・給知蔵奉行きゅうちぐらぶぎょう・松奉行まつぶぎょうなどもこれに付属しました。

藩士の階層には、家老かろう・人持ひともち・諸頭しよがしら・平士へいし・徒士かちなどがありました。家老は武士の中の最高位で、数十人の給人きゅうにんを抱える者もいました。人持は家老に次ぐ位で、多くの家来を抱えていました。組頭くみづかみ・物頭ものづかみ・番頭ばんづかみなど諸役所の奉行は諸頭に含まれました。藩士の大部分は平士で、馬廻組うまわりぐみ・小姓組こしょうぐみ・組外組くみはずれぐみなど数組に分けられ、それぞれ組には組頭が置かれていました。徒士は侍と足軽の中間で、少人数でした。このほか、藩士以外の足軽・小人・坊主(茶堂)・千人夫せんにんぶなどがいました。

家臣の数は藩祖利治治世の寛永16年(1639)に106人、承応元年(1652)に223人で、2代利明治世の延宝2年(1674)に219人でした。11代利平治世の天保15年(1844)に278人で、その後は明治まで変動しませんでした。藩祖利治は承応2年(1653)に藩財政不足のため、筆頭家老の玉井市正貞直たまのいちのかみさだなおをはじめ、家臣24人を加賀藩へ返しました。

## 大聖寺藩の歴代藩主

藩主名	在任期間 西暦		在任年間	国守号	院号
初代利治	寛永 16 年～万治 3 年	1639 ～ 1660	22 年	飛騨守	実性院
2 代利明	万治 3 年～元禄 5 年	1660 ～ 1692	33 年	飛騨守	大機院
3 代利直	元禄 5 年～宝永 7 年	1692 ～ 1710	19 年	飛騨守	円通院
4 代利章	正徳元年～元文 2 年	1711 ～ 1737	27 年	備後守	正智院
5 代利道	元文 2 年～安永 7 年	1737 ～ 1778	42 年	備後守	顕照院
6 代利精	安永 7 年～天明 2 年	1778 ～ 1782	5 年	備後守	高源院
7 代利物	天明 2 年～天明 8 年	1782 ～ 1788	7 年	美濃守	覚成院
8 代利考	天明 8 年～文化 2 年	1788 ～ 1805	18 年	飛騨守	峻徳院
9 代利之	文化 3 年～天保 7 年	1805 ～ 1836	31 年	備後守	篤舎院
10 代利極	天保 8 年～天保 9 年	1837 ～ 1838	2 年	駿河守	恭正院
11 代利平	天保 9 年～嘉永 2 年	1838 ～ 1849	12 年	備後守	見龍院
12 代利義	嘉永 2 年～安政 2 年	1849 ～ 1855	7 年	備後守	諦岳院
13 代利行	安政 2 年	1855	5 月		懿香院
14 代利啓	安政 2 年～明治 2 年	1855 ～ 1869	15 年	飛騨守	法徳院

藩祖利治と2代利明以外には、藩政上に顕著な業績を残した藩主はいなかったようです。8代利考は学問を好み、質素儉約に努め、9代利之は『加賀江沼志稿』の編纂に努め、14代利啓は書画や能楽や茶道に優れ、幕末の藩政改革を断行したものの、初期の2人には遠く及びませんでした。これらの藩主に対し、3代利直は長く江戸にいて藩政をかえりみず、神谷と村井の抗争を招き、4代利章は財政逼迫を配慮せず、正徳一揆が起りました。また6代利精は鷹狩りや遊芸を好み、藩政をかえりみず、9代利之は10万石に昇格させ、財政を逼迫させました。2代利明・4代利章・12代利義・13代利行・14代利啓など加賀藩からの養子が多く、何事につけても本藩に依存する気風がありました。重大な意思決定をするときは、必ず加賀藩の意向を受けてから決定しました。

## 江沼神社と長流亭

現在の錦城小学校に隣接して江沼神社があります。この神社は明治5年（1872）に前田家が祖先としている菅原道真（天神公）と初代藩主前田利治公を祀るために「松島天満宮」として建てられたものです。現在の江沼神社と呼ぶようになったのは明治10年からのことです。この神社にはひさご池や中島にかかる八つ橋などが整備された庭園がありますが、藩邸に付設された回遊式の大名庭園と



江沼神社庭園（大聖寺八間道）

してとても貴重なものとなっています。

また、境内北側、大聖寺川に面して、宝永6年(1709)に3代利直の休憩所として建てられた「長流亭」があります。当初は「川端御亭」と呼ばれていました。この建物は柿葺の平屋ですが、欄間や障子、板戸などには斬新なデザインがほどこされ、設計に小堀遠州の建築意匠を採り入れた可能性も指摘されるなど、高い評価を得て、現在、国の重要文化財となっています。



江沼神社社長流亭  
(加賀市八間道)

## 実性院と全昌寺

大聖寺の南はずれ、下屋敷から神明町にかけての一带は、山ノ下寺院群と呼ばれ、禅宗・浄土宗・日蓮宗の各派の寺院が並んでいます。その一つ、実性院は大聖寺藩祖利治以来の歴代藩主の位牌が祀ってあり、大聖寺前田家の菩提寺となっています。寺の後ろの石段を登ったところには、初代から14代までの歴代藩主すべての墓が並んでいます。とくに、藩祖利治の墓はひときわ大きく、その横には利治の死とともに殉死した3人の家来の墓も立てられています。



大聖寺藩歴代藩主の墓  
(大聖寺下屋敷 実性院)

また、この寺は、毎年9月初旬ともなると萩の花でいっぱいとなり、萩の名所としても知られています。

実性院からしばらく歩くと全昌寺があります。元禄2年(1689)8月に、俳人松尾芭蕉が「奥の細道」の行脚の途中、この寺に泊まりました。このとき詠んだ句が「庭掃いて 出ばや寺に 散る柳」です。この全昌寺は、大聖寺城主山口玄蕃頭宗永の菩提寺でもあり、また517体の全ての仏像が揃った五百羅漢が残されていることでも有名なお寺です。

## 十村制度と郷村制度

十村には村組を担当した組付十村(定員4~6人)と、組を持たず組付十村を監督した目付十村(手振十村)の2種類がありました。十村組は一向一揆の遺制を継ぎ、西ノ庄・北浜・山中谷・瀧廻り・能美境・那谷谷・四十九院谷・奥山方の8組に分けられていました。各組の村数は20ヶ村ほどで、平均50ヶ村ほどの加賀藩に比べてかなり少なく、1人で2~3組を担当する十村もありました。十村の業務は、勸農、租税の徴収、組内の治安維持、農民の生活指導など行政全般に亘って行っていました。

組付十村には役料として鋤役米が、目付十村には御切米が仕給されました。鋤役米は15~60歳の男子から米2升を徴収したものです。組付十村は十村代官として租米・春秋夫

銀・小物成銀・郡打銀などの徴収を行い、その手数料として口米が仕給されました。十村の中には、江戸後期に苗字帯刀を許可される者もいました。堀野新四郎(右)・和田五郎右衛門(島)・荒森宗左衛門(保賀)・鹿野小四郎(小塩辻)・和田半助(分校)・橋本源左衛門(動橋)などの家は代々十村を務めました。このほか、農民以外の町人や北前船主でも十村や十村格(名誉職)になった人もいます。な



農事遺書(個人蔵)

お、初代鹿野小四郎は宝永6年(1709)に、貴重な農書『農事遺書』を著しました。

村肝煎・組合頭・百姓代は村方三役(地方三役)と呼ばれました。このほか、算者・小走り・山番人などを置く村もありました。村肝煎は頭振(水呑百姓)を除いた村人から入札(選挙)で選ばれ、一定の役料が仕給されました。その業務は租税収納、治安維持、村民扶助、他村との交渉など多岐に亘っていました。組合頭は村肝煎の補佐役で、村の大小により2~5人ほど置かれ、村万雑(雑費)から若干の役料が仕給されました。百姓代は臨時の連名者で、役所への報告に形式的に名前を連ねました。なお、大聖寺藩では五人組制度の代わりに十人組制度がとり入れられていたので、各村に十人頭が置かれていました。

## 参勤交代と北国街道

大聖寺藩の参勤交代は、江戸に行く参勤(参観)89例と国元に帰る交代(就封)92例が知られています。外様大名は毎年4月の実施と定められていましたが、必ずしも4月に行われたわけではありません。藩祖利治は、すべて9月・10月に参勤交代を行いました。大名行列の人数は250~300人が多く、9代利之は文政5年(1822)4月に最大の397人で交代を行っています。そのコースには金沢方面へ向かう中山道經由の下街道(131里)と福井方面に向かう中山道經由の上街道(148里)、東海道經由の上街道(139里)の3つがありました。下街道は距離が短いこと、全行程

加賀藩参勤交代之図  
(石川県立歴史博物館所蔵)

のうち前田家の領土が4分の1を占めていたことから最も多く利用されました。なお、大聖寺藩主は下街道を利用したとき、必ず金沢城下の旅籠に宿泊して、金沢城への挨拶や寺院(宝円寺・天徳院)の参詣を行いました。

大聖寺藩領の北国街道には、慶長年間(1596~1615)に橋駅(駅馬17疋)・大聖寺駅(駅馬11疋)・動橋駅(駅馬14疋)・月津駅(駅馬22疋)などの宿駅が置かれました。このほか、元禄8年(1695)頃と江戸末期には一時的に作見駅も置かれました。大聖寺駅・動橋駅間の荷物運賃は、文政5年(1822)に人足が45文、本馬が91文、軽尻が56文でした。大聖寺宿には、江戸後期に伝馬肝煎や本陣役を務めた板屋・吉田屋、伝馬肝煎や六



大聖寺藩関所の図  
 (「錦城名所」より)

じょうごてん もん と やまと や なにわこう  
 條御殿（東本願寺）門徒の指定宿を務めた大和屋、浪花講  
 しんと ふくしま や おおつ や きょうや  
 信徒の指定宿を務めた福嶋屋・大津屋・京屋などがあり  
 ました。

たちばな よしざき かぜたに  
 大聖寺藩では城下町の西端に関所を、橘・吉崎・風谷に  
 くちどめばんしよ  
 口留番所を置き、越前との往來を監視しました。関所は日  
 の出とともに門扉を開き、日没とともにそれを閉じ、夜間  
 の通行は禁止されていました。足輕数人が当番と非番に分  
 かれ、昼夜ともに門番に当たっていました。

## 大聖寺川の舟運

大聖寺川には、水主2人が乗り込む川舟が敷地橋・堀切  
 みなと  
 湊（塩屋港）間を往來し、人や物資を運んでいました。敷  
 地橋から堀切湊までの間には、永町御蔵河道（舟着場）・福  
 ながまち おくらこうど ふく  
 田河道・瀬越御蔵河道などがありました。舟賃は文化9年  
 だこうど せごえおくら ぶんか  
 （1812）に川上げ・川下げともに、永町御蔵河道から瀬越御  
 蔵河道までが銀60匁、瀬越御蔵河道から沖合の親船（元  
 船）までが錢1貫200文でした。川上げ物資には舟才許・  
 ていひこはち  
 亭彦八の送り切手が、川下げ物資には奉行・十村・問屋などの送り切手が必要でした。亭  
 彦八は送り切手の発行、物資の口錢徴収を行い、口錢の4分を得ていました。大聖寺藩唯  
 一の外港「堀切湊」には、塩屋船番所をはじめ、湊問屋・魚問屋などが建ち並んでいまし  
 ました。柴山瀧にも川舟が往來し、その周辺には作見・片山津・潮津・柴山・上人・中島・月  
 津などの河道がありました。なお、上人河道（伊切）は遊行上人が利用したものです。



大聖寺川の屋形船

## 采女事件と政治抗争

3代利直は元禄5年（1692）7月に弟利昌（采女）に新田1万石を分与したので、  
 だいしょうじしんでんはん としまさ うねめ  
 大聖寺新田藩が成立しました。利昌は宝永6年（1709）2月に上野寛永寺で行われた5代  
 とくがわつなよし ほうえ かんえいじ  
 將軍徳川綱吉の法会において、他藩の藩主4人とともに朝廷の使者をもてなす御馳走役  
 を命じられました。ところが、利昌はこの法会が行われた2月16日に乱心し、同寺塔頭  
 けんしょういん やまとやなぎもとほんしゅ おだひでちか けんもつ  
 の顕性院で大和柳本藩主の織田秀親（監物）を殺害しました。そのため、利昌はその身柄  
 やましろうどほんしゅ いしかわよしたか  
 を山城淀藩主の石川義孝に預けられ、同月18日に切腹となり、大聖寺新田藩も廃藩とな  
 りました。領地1万石は、幕府に没収されたのち、同年4月に大聖寺藩に返還されました。

3代利直の治世には、藩創建以来の名門である家老神谷内膳と新鋭の家老村井主殿と  
 の政争が起きました。この対立は単に2家の争いに止まらず、多くの藩士が加わる派閥  
 対立となり、藩政を長く停滞させる原因ともなりました。2代主殿は宝永2年（1705）12  
 月に内膳守応に「大年寄」（名誉職）を命じ政治から遠ざけました。こうした中、同7年

(1710) 2月に2代主殿をはじめ、村井派が一挙に切腹や追放を命じられる疑獄事件が起きました。3代利直は加賀藩に指令を仰いだ結果、2代主殿と忤に切腹、3人に打首、8人に追放、17人に御暇、3人に扶持放を命じました。

その後、4代利章は正徳3年(1713)8月に内膳守応の家老職を解任し、金沢抑留を命じました。この抑留は、内膳守応の政策に対する藩士の不満を鎮めるために行ったといわれています。なお、内膳守応は同5年9月に外出禁止を許され、隠居領500石を与えられました。



神谷内膳寄進灯ろう  
(大聖寺下屋敷 実性院)

## 正徳の百姓一揆

正徳2年(1712)8月に、当地方に強風が吹き、作物などに大きな損害がでましたが、藩は年貢米の取り立てを例年どおりとしました。これに不満をもった農民たちが、那谷村で検分していた役人たちを襲い百姓一揆が起きました。農民たちはこのあと、串茶屋(現在の小松市串茶屋町)、庄、山代、山中などの間屋や十村宅を襲い、つぎつぎと打ち壊しました。一揆は、ほとんどの村の百姓が強制的に参加させられるなど全藩的な規模のものとなり、結局、大聖寺藩は農民たちの要求をほぼ認めることで解決しました。

もともと、大聖寺藩は実質7万石しかなく、日頃より財政が厳しく、年貢米を厳しく農民に納めさせていました。こうしたことが背景にあり、たびたび百姓一揆の未遂事件がおこりました。

## 伊能忠敬の大聖寺藩領測量と海防策

伊能忠敬は享和3年(1803)2月25日に江戸を出立し、東海・北陸・佐渡を測量して、10月7日に江戸へ帰着するという第四次測量を行いました。忠敬ら測量隊一行8人は、同年6月24日に吉崎(東本願寺かけ所泊)から大聖寺町に入り、同日に本町の板屋泊(一部は松屋泊)、25日に片野村の肝煎宅泊、26日に橋立村の因随寺(現福井別院橋立支院)泊をもって大聖寺領内の海岸部を測量しました。大聖寺藩では下役人や十村が測量隊を見舞いましたが、加賀藩では十村手代や村肝煎が対応しました。福井藩では、「隠密がましき」行為として警戒されました。



伊能忠敬

大聖寺藩は文政8年(1825)のフェートン号事件に伴う「異国船打払令」の発令を契機に、塩屋・橋立・日末の3ヶ所に御台場を築造しました。嘉永3年(1850)には、塩屋御台場に大砲3挺、橋立御台場に大砲5挺、日末御台場に大砲2挺が置かれていました。12代利義は軍備の必要性を痛感し、同5年に西出源蔵を金沢に遣わし、吹屋の村山四郎兵衛

に大砲の鑄造を命じました。大砲は資金不足のため 21 挺中 3 挺しか完成せず、残りの 18 挺は北前船主の久保彦兵衛をはじめ、西出孫左衛門・増田又七郎・西野小左衛門などの献金によって鑄造されました。

## 藩財政と十万石の高直し

9 代利之の治世の歳入・歳出をみると、歳入は年貢米 3 万 8190 石余、借知米 1546 石余、会所銀・年賦米などの合計 4 万 179 石余、歳出は給知米・鍬役米・御救米など合計 3 万 1943 石で、正残米は 8236 石となりました。現銀収入は正残米を売り払った銀 329 貫匁余と、小物成・夫役・運上銀を加えた銀 733 貫匁余となりました。これに対し、藩主在国の年は銀 827 貫匁余、江戸在府の年は 924 貫匁余を支払ったので、在国で 93 貫 700 匁余、在府で 191 貫匁余の赤字が出ました。大聖寺藩では放漫な政治が続き、製塩業・陶器業・和紙業など産業も十分に成熟せず、新産業もほとんど発生しない中、加賀藩の援助、大坂商人からの借金、大聖寺町人や北前船主の御用金などに依存し続けました。

9 代利之は文政 4 年 (1821) 12 月に、加賀藩藩主 12 代齊広の願書により幕府から 10 万石の待遇が公認されました。10 万石の内訳は本高 7 万石・新田高 1 万石に、毎年、本藩から仕給される米 2 万俵を加えたものでした。しかし、幕府の朱印状は 8 万石で、本藩の仕給米も毎年金 300 両にすぎませんでした。9 代利之はまさに名を得て実を捨て、諸藩とは逆に実高よりも表高が多い便宜的な高直しを行いました。ともあれ、加賀藩は 10 万石の高直しの無意味を知りつつも、長年の大聖寺藩の懇願を受け入れ、ついに幕府にその願書を提出したようです。

## 山中温泉・山代温泉の発祥と隆盛



山中温泉縁起絵巻 (部分)  
(山中温泉医王寺所蔵)

山中温泉は、慶安元年 (1648) の火事により、新しく町割が行われ、総湯 (湯ざや) を中心とし湯本 12 軒をはじめとする 50 軒前後の湯宿が営まれていました。藩主や上級武士をはじめ、元禄 2 年 (1689) には松尾芭蕉が 9 日間逗留し「扶桑三の名湯」と讃えました。その後、北前船主や船

山中・山代の両温泉はともに奈良時代の僧、行基が開湯したとの伝説をもち、すでに中世から湯治場として広く知られていました。山中温泉では文明 5 年 (1473) に蓮如が、山代温泉には永禄 8 年 (1565) に明智光秀が入湯した記録が残っています。なお、山中温泉は鎌倉初期の 12 世紀末には長谷部信連が、土石に埋まった源泉を再興したという伝承もあります。



山代温泉縁起図  
(山代温泉薬王院所蔵)

頭も訪れるなど、山中温泉は広く知られるようになりました。なお、山中温泉では、湯宿は内湯をもたなかったため、ほとんどの湯治客は総湯を利用しました。

一方、山代温泉は、総湯を中心に18軒の温泉宿が囲み、湯の曲輪を形成しました。しかし、山中温泉とは異なり、湯宿それぞれが湯壺をもっていたため、湯治客は宿中の「内湯」にも入浴しました。そのため、芸妓や舞子なども湯宿に出入りするようになりました。

## ごとうさいじろう 後藤才次郎と九谷焼

伝承によれば、藩祖利治は領内の九谷村で陶石が発見されたのを契機に、焼物の生産を考え、九谷鉢山の開発に従事して、錬金の役を務めていた後藤才次郎を肥前有田に陶業技術修得に遣わしたと伝えられています。才次郎は帰藩後、九谷の地で窯を築き、田村権左右衛門を指導して、明暦元年(1655)頃に色絵磁器の生産を始めました。これが九谷焼のはじまりとされています。

その後、この事業は2代藩主利明に引き継がれましたが、およそ50年間で九谷焼の製造は突然廃止されました。この時期につくられた焼き物は「古九谷」と呼ばれ、その大胆なデザインなどは特に高く評価されています。古九谷の色絵技法は、力強い呉須の線描の上に、絵の具を厚く盛り上げる方法です。色調は紫・緑・黄を主調とし、補色として紺青・赤を使用しています。作品は、山水、風物を題材に豪放な味わいを醸し出していますが、一定の画風というものは存在せず、きわめて変化に富んでいます。中でも赤を使わず「塗埋手」という手法で描かれた「青手古九谷」は強烈な印象を与えています。

## 九谷焼の再興

大聖寺町の豪商、4代吉田屋伝右衛門は文政6年(1823)に若杉窯の陶工粟生屋源右衛門を招き、九谷焼を再興しようと九谷村で「吉田屋窯」を開きました。彼が古九谷窯の復興を果たしたのは72歳のときでした。吉田屋窯は冬季の積雪期間が長く、物資の運搬が不便であったため、わずか数年で閉窯となりました。5代伝右衛門は同8年7月に大聖寺町の町人米屋次郎作とともに吉田屋窯を中野村(山代出村)の越中谷に移し、1年余の準備期間を経て翌年8月に開窯しました。吉田屋の陶器方は20人で、素地職が8人、絵付職が3人いました。製品は古九谷青手様式に倣ったものが多く、裏面に角福の印が色釉で描かれていました。吉田屋窯は吉田屋の再興策として始められましたが、結果は過大な負債を残すだけとなり、天保3年(1832)に宮本屋に譲渡されました。このあと、宮本窯、松山窯、九谷本



後藤才次郎顕彰碑  
(山中温泉九谷町)



吉田屋窯百合図平鉢  
(石川県九谷焼美術館所蔵)

窯など多くの優れた九谷焼が作られるようになり、これらの焼き物は「再興九谷」と呼ばれ、当地の焼き物の技術を現在まで伝えていく役割を果たしました。

## 山中塗りの歴史

山中塗りは、安土桃山時代の天正年間(1573~92)に、越前から山伝いに、山中温泉の上流約20kmの真砂という集落に木地師の集団が移住したことを起源とする言い伝えがあります。その後、山中塗りは山中温泉の湯治客への土産物として造られるとともに、江戸中頃からは会津、京都、金沢から塗りや蒔絵の技術を導入して木地とともに茶道具などの塗り物の産地として発展し、全国的にも有数の漆器の産地となりました。



手挽きろくろの図

## 大聖寺の絹織物



蘭糸曳之図 (「民家検労図」より)

当地は古くから絹の産地とされています。その発端は荻生村の娘が京都で西陣織を習い、帰ってから村で織物を始めたこととされています。その後、この娘が庄村に嫁いたため、庄村で織物が盛んになり、庄員の餅屋、京屋などが中心となって手広く販売されるようになりました。これが庄絹と呼ばれるものです。また、庄員の沢屋仁左衛門は、江戸中頃、大聖寺にもこの織物技術を広めたと伝えられています。その後、大聖寺絹は貧しい武士の奥方の内職として広まり、「お内儀絹(おかみさまぎぬ)」と呼ばれ、大聖寺は一躍織物の産地として知られるようになりました。

## 北前船の活躍と3つの拠点

江戸時代の中頃から明治中期頃までの間、大坂を拠点に、瀬戸内を通過して日本海を北上し、北海道までを往来した商船を北前船と呼んでいます。その特徴は各地の港で積み込んだ荷物を売り買いし利鞘(差額)を稼ぐ「買積船」であったことでした。とくに鱈や昆布などの北海道の海産物を大量に大坂まで運び、多額の富を得ました。なお、船は冬期間、大坂湊の三軒屋(専用囲場)に置かれました。大聖寺藩の橋立村・塩屋村・瀬越村では、いずれも北前船が接岸できる湊をもっていませんでしたが、18世紀後半頃から多くの北前船主や船頭を輩



北前船模型  
(北前船の里資料館展示品)

出し、「北前船のふる里」として栄えました。

橋立には42名もの北前船主や船頭がいたことが、寛政8年(1796)の記録に残っています。これらの船主の中でも、明治以降、当地の発電事業や銀行の開設などに尽力した久保彦兵衛や函館に拠点を移し北洋漁業で成功した西出孫左衛門などがよく知られています。



加賀市瀬越町

瀬越は大聖寺川の河口近くに位置する小さな集落ですが、その歴史はととても古く、蓮如が瀬越の亭家まで碁を打ちに来たとの言い伝えもあります。亭家は前田家が大聖寺藩を治めることになった時期には船裁許も務めていました。この瀬越からは、大聖寺藩政以前から、敦賀までの米の輸送をおこない、現代までおよそ400年もの間、海運業一筋の家業を続けた廣海二三郎と、早くから和船を汽船に切り換え、海外航路を切り開いたことで知られる大家七平の2大船主ができました。

堀切湊(塩屋港)は大聖寺藩の唯一の外港として、大坂への廻米をはじめ、諸物資の出入りが行われ、塩屋船番所・湊問屋・魚問屋なども置かれていました。この塩屋では、とくに西野小左衛門、西野小右衛門などが活躍しました。



加賀市橋立町

大聖寺藩は、幕末に至り財政上の危機・国防上の必要に際して、北前船主らから多額の献金を得ました。藩ではこれらの船主に対し、士分に取り立てるなど、禄高で身分上の優遇を図りました。

船主や船頭は、常に危険に晒される船乗りたちの航海安全を祈願し、村の神社に船絵馬を奉納しました。橋立や瀬越、塩屋の神社の拝殿には、そうした船絵馬が多数掲げられています。

## その他の産業

【漁業】 猟船数は江戸後期、塩屋村が25艘と最も多く、これに小塩村が13艘、瀬越村が10艘、塩浜村が7艘、片野村が6艘などと続きました。塩屋村は広大な漁業権を有し、大聖寺町とともに魚問屋が置かれていました。小塩村では天明8年(1788)頃から多くの漁師が北前船の水主になったため、漁業が次第に衰退しました。なお、小塩村にも享保2年(1717)まで魚問屋が置かれていました。漁獲物では、瀬越村の鰯、塩浜村の鯛、片野・黒崎・橋立・小塩村の和布などが美味で知られました。

川船数(淡水漁業)は江戸後期に串・柴山・中島村が11艘で、これに片山津村が6艘、月津村が3艘と続きました。なお、柴山渦周辺の村々には、「ツケ」という特殊漁法がありました。これは晩秋に、桜の枝を渦端に沈めて置き、早春にそれを引き上げ立網を張り、その中の魚を獲る漁法です。

【製塩業】塩釜数は江戸後期に伊切村（新保出村）に17個、浜佐美村（佐美出村）に14個、篠原新村（篠原出村）に11個ありました。これ以前は3ヶ村のほかに、片野・中浜（上木出村）・小塩・塩浜・塩屋村などでも製塩が行われていました。塩は藩の専売品で、「塩手米制」によって生産されました。塩手米制とは、塩師に対し生産費や食料費を米で前年に前貸しをして、翌年の新塩で返却させるものでした。この塩手米制は瀬戸内海産の安い塩が移入されたため次第に崩壊し、天保元年（1830）頃から「塩役制」に移行されました。塩の仲買人の中には、北前船主から他領産の塩を安く購入し、「土産塩」と称して領内で販売する者もいました。製塩法は「揚浜式製塩」で、生産費の半分を燃料代（塩木）が占めました。なお、福田町には南蔵（1000石）、中蔵（300石）、北蔵（700石）の塩蔵があって、塩問屋（初め塩奉行）が管理していました。



塩釜之図（「民家検労図」より）

【製茶業】2代利明は寛文中（1661～72）に山城（京都府）・近江（滋賀県）両国から茶の実を購入し、領内の村々に配分しました。茶役は江戸後期に串村が銀43匁で最も多く、これに山代村が29匁余、保賀村が25匁余、片山津村が18匁余と続きました。打越村は弘化元年（1844）に宇治茶の製法を導入し、領内第一の生産地となりました。串村甚四郎は代々大聖寺藩の茶問屋を務め、大聖寺町に下問屋2人を置いていました。藩は文化10年（1813）に甚四郎の独占体制を廃し、一時的に大聖寺町の田中屋十左衛門を茶問屋、吉田屋伝右衛門を茶頭取に任命しました。

【和紙業】2代利明は、延宝4年（1676）に中田村五郎兵衛と足軽の栗村茂右衛門を河北郡二俣村に派遣し、御料紙の製法を習得させました。同時に日常紙の製法も習得させ、「紙屋谷」と呼ばれた中田・長谷田・上原・塚谷で製造させました。紙屋谷は土谷村（上原出村）を加えて「紙屋五ヶ村」と称することもありました。御料紙は中田村の角屋家と大茂谷家で製造されました。日常紙は大聖寺町の紙問屋を通して販売されましたが、正徳一揆後の一時期は紙屋谷の職人が大聖寺町で直接販売しました。



紙漉図（「民家検労図」より）

【製炭業】奥山方や山中谷の村々では、日用品の炭・杪・薪などを生産し、藩および藩士や町人に販売しました。御用炭は、主に奥山方の大土・坂下・九谷・市谷・上新保・杉水・荒谷・今立村で生産されました。御用杪は東谷・西谷・三谷の村々で生産されましたが、その値段は元禄期（1688～1703）に東谷杪100束が7匁8分、西谷杪100束が6匁4分、三谷杪100束が5匁3分で、3地区で異なっていました。

【製油業】大聖寺藩では、荏油や菜種油とともに桐油や桐油が多く生産されました。油屋は元禄期に福井藩から油桐の実と桐の実を購入し、大聖寺町で桐油と桐油を製造しま

した。その後、油桐や桐は三谷の曾宇・直下・日谷村をはじめ、領内の村々でも栽培されるようになりました。桐油は江戸末期に「大聖寺桐油」と称し、他領にも知られる産物となりました。なお、石川県の桐油生産量は、大正3年(1914)に全国第4位で、その8割を三谷村・三木村が占めていました。



アブラギリの実

## 芭蕉と北陸行脚

元禄2年(1689)7月27日(新暦9月10日)から8月5日まで、俳聖、松尾芭蕉は「奥の細道」の旅の途中、山中温泉の湯宿、泉屋に逗留しました。この間、芭蕉は薬師堂を詣で、温泉につかり、風光明媚な景色を心から楽しみ、山中を「扶桑三の名湯」と讃えました。そして「山中や 菊は手折らじ 湯の匂ひ」の一句を詠みました。この句は「山中の湯に浴せば、中国の菊滋童が集めた不老長寿の菊の露を飲むまでもない」という意味です。なお、菊滋童とは菊の花から滴る露を飲み、70歳あまりまで生きたといわれる少年のことです。

芭蕉逗留 泉屋跡石碑  
(山中温泉湯の出町)

現在の菊の湯と道路を隔てた前に芭蕉の宿泊した泉屋がありました。芭蕉はこの泉屋で8日間を過ごしました。この泉屋の当主はまだ14歳の少年久米之助で、芭蕉は弟子入りしたこの少年に自らの「桃青」の一字をとって「桃妖(とうよう)」の号を与えました。桃妖は芭蕉の期待にこたえ、後に北枝とともに加賀俳壇の発展に寄与しました。

## 大聖寺藩の学問と芸術

大聖寺藩では、藩士子弟の文武にわたる教育に力が注がれ、学問や芸術が武士の嗜みとしての文化が醸成されました。こうした精神は、明治期以降も受け継がれ、多くの人材を世に送り続けました。幕府や加賀藩の朱子学への傾倒の影響を受け、大聖寺藩においても、江戸で『九経談』を出版した大田錦城をはじめとする儒学者や漢学、算学、蘭学などで優れた人材を輩出しました。天保11年(1840)に「時習館」と称する学問所、安政4年(1857)には武道を学ぶための有備館が設けられました。東方芝山は、漢学や洋学、兵学などのあらゆる学問に優れ、藩校の充実や藩士の留学に力を注ぐなど、幕末の藩政に大きな影響を与えました。



大田錦城遺稿集

史学・地誌では『友翹紀聞』『藩国見聞録』『加賀江沼志稿』などをはじめ、『秘要雑集』



茂憩紀聞  
(石川県九谷焼美術館所蔵)

『江沼郡雑記』など多くの著書が編纂されました。これらは、現在でも当地の歴史、文化、地理などを研究する際の重要な文献史料となっています。『茂憩紀聞』は享和3年(1803)に塚谷沢右衛門が著述したもので、領内の名所旧蹟、神社仏閣の口碑伝説などを記録したものです。『藩国見聞録』は弘化2年(1845)に奥村永世が著述したもので、領内の地誌、神社仏閣記、藩士の旅行記、諸家の碑銘などを集めたものです。『加賀江沼志稿』(32巻)は弘化元年(1844)に

小塚秀得が著述したもので、領内の総合地誌というべきものです。

医学では、竹内玄洞・渡辺卯三郎・馬島健吉などをはじめ、樫田玄寛・草鹿玄泰など多くの医師が活躍しました。竹内玄洞は長崎に留学、シーボルトの門下生となり、のち幕府の医師として蕃書取調出仕を務めました。渡辺卯三郎は金沢の黒川良安に学び、さらに大坂の緒方洪庵の適々齋塾(適塾)に入門、その7代塾頭も務めました。その後、卯三郎は金沢病院大聖寺出張所(のち江沼病院)の開設に際し、その顧問に任命されました。馬島健吉は初め金沢の黒川良安の門下生となり、安政6年(1859)に緒方洪庵の適塾に入門、蘭学を修めました。その後、健吉は石川嶂とともに大聖寺藩の支援



渡辺卯三郎

を得て渡欧し、外科・内科・眼科などを学びました。

絵画では佐々木泉景・小原文英・山口梅園をはじめ、東方蒙斎・小島春暁など多くの絵師が活躍しました。泉景は享和元年(1801)に禁裏御用を務め、翌年に法橋位に叙せられ、文化4年(1807)から加賀藩御用を務めました。文英は初め狩野派、



佐々木泉景作「群鹿図」(実性院所蔵)

のち谷文晁から文人画を修得しました。梅園は小原文英に南画を学び、のち京都の浦上春琴や山本梅逸に師事しました。

## 大聖寺城下町の文化と茶の湯

茶の湯は藩主から藩士・町人に嗜まれ、道具を育て、作法を定着させました。城下町には多くの茶室や菓子店、茶問屋や道具商が集中していました。

茶道とともに、漢詩、歌道、俳諧、能楽、花道、書道、絵画などが発展しました。茶の湯の文化は、優れた茶器としての九谷焼を発展させるとともに、その道具へのこだわりは、山中塗の技術を高める背景にもなりました。

## 山中節の発祥

北前船の船乗りたちは、1年の疲れを癒すために船を出さない冬期間は山中温泉や山代温泉などで1週間、長い場合は1カ月もの間、湯治のために旅館に泊まりました。特に山中温泉では、船乗りたちが逗留している間、毎日のように「総湯」に通いました。入浴中は各旅館の「ユカタベ」と称する娘たちが、お客の浴衣を持って、お湯から上がるのを待っていました。

のんびりと湯につかる男たちは、北海道の江差や松前、あるいは出雲などで習い覚えた追分節をうたい始めました。そのうち「ユカタベ」の娘たちがそれを真似て、浴場の中と外で唄のやり取りをするようになりました。『山中節』は、湯治客とこれらの娘たちの唄のやり取りや掛け合いから生まれたといわれています。そのため、はじめは定まった唄い方がなく、歌詞も思いつきで唄われていました。ところが昭和2年、美声で知られた芸妓、初代米八が三味線の音に合わせて唄った「山中節」がレコード化されて日本全国に広まりました。これが現在に伝えられている「正調山中節」です。



ユカタベの姿も見える  
山中温泉総湯前  
(明治40年頃「写真集加賀江沼より」)

「忘れしゃんすな 山中道を 東や松山 西や薬師  
送りましょうか送られましょうか せめて二天の橋までも  
山が高うて山中見えぬ 山中恋しや 山にくや」

「山中節」の節回しは、唄いこなすのが難しいとされていますが、ゆったりして哀調を帯びた音色は、多くの国民に愛され人気の高い民謡となっています。

# [近現代編]

幕末・維新时期／明治・大正期／昭和時代

## 幕末・維新时期

### 廃藩置県と町村区画の変遷

幕末期の動乱の中で、大聖寺藩は、幕末の大聖寺藩随一の教育者であり、儒学者でもあった藩士、東方芝山を登用して、富国強兵策をとりました。また、慶応4年(1868)の戊辰戦争では、本藩である加賀藩の方針に従って幕府軍に与しようとしたのですが、鳥羽・伏見の戦いで幕府軍が敗れたことを知ると、やむなく新政府軍について北越戦争に出兵しました。なお、最後の第14代利嚳は、明治2年(1869)の版籍奉還で藩知事となりましたが、同4年(1871)の廃藩置県で職を解かれました。

明治4年7月に、明治新政府の廃藩置県により、大聖寺県が誕生しました。しかし、この年の11月には、金沢県に合併されたので、大聖寺県が在ったのは、僅か4ヶ月間のことでした。なお、金沢県も明治5年2月には石川県と改称したので、これ以降、当地は石川県江沼郡となりました。

このちは、江沼郡はいくつかの区に分けられ、さまざまな変遷がありました。明治11年7月にはようやく「郡」が行政区画として公認され、大聖寺に江沼郡役所が設置され、郡長が配置されました。また、郡のもとには、23ヶ所の「戸長役場」が置かれ、同17年には14ヶ所に統合されました。

明治22年には、明治政府による地方制度の総仕上げとして、市制・町村制が実施されました。これにより、江沼郡は1つの町(大聖寺)と24の村に整理されました。

### パトロン事件

明治元年(1868)、大聖寺藩は官軍から弾薬(パトロン)の調達を命じられた際、その資金不足を補うために一歩銀や銀の簪などを集めて、御城山(錦城山)下の洞穴で二歩金を偽造しました。この貨幣の偽造事件をパトロン事件といいます。藩は事件が発覚した翌2年に、市橋波江に全責任を負わせ、その切腹をもって終結させました。



大礼服姿の前田利嚳公  
(江沼神社所蔵)



にせがね  
贋金づくりの洞穴  
(大聖寺地方町 錦城山)

## 浦上キリシタンの預かり

明治政府は、<sup>しんとう</sup>神道国家を進めるために、キリスト教の国内布教を認めず、旧幕府同様の禁圧政策をとり、明治元年(1868)4月に、浦上(長崎)の信徒3300人余りを全国20の<sup>しよはん</sup>諸藩に分けて<sup>はいる</sup>配流することを決定しました。大聖寺藩では、50人のキリシタンを預かり、同3年(1870)1月に、大聖寺庄兵衛谷の<sup>しようべえだに</sup>鉄砲場の長屋に収容しました。藩では、御預けキリシタンたちの<sup>かいしゅう</sup>改宗を迫るため、藩内の各真宗寺院に<sup>せつゆ</sup>説諭を命じました。説諭は数人ずつ分けて、各寺院に預け、僧侶らによって行われました。『大聖寺藩史』によれば、結局、50人のうち、5人が病死し、のこり45人のうち、改心した者は18人であったと記録されています。この浦上キリシタンは、同5年7月に金沢の<sup>うたつやま</sup>卯辰山に送られましたが、この配流については、諸外国からの強い抗議もあり、同6年すべての信徒が釈放されました。



庄兵衛谷鉄砲場跡地  
(大聖寺神明町)

## みの虫一揆



新家理与門の碑(加賀市分校町)

明治4年(1871)11月、大聖寺県内で農民一揆が起きました。この一揆は、<sup>みのむし</sup>胴ミノを着た農民の姿が蓑虫に似ていたので「みの虫一揆(明治一揆)」と呼ばれています。11月24日の夜、農民たちは<sup>うちこししょうこうじ</sup>打越勝光寺の門前に集結し、大聖寺<sup>そぜい</sup>県の租税係などをしていた役人たちの家を次々と打ち壊しました。翌日には農民およそ千人が<sup>しきじむら</sup>敷地村の端で<sup>あおち</sup>青池大<sup>だいさんじ</sup>参事に七か条の要求をつきつけました。その主なる内容は、大聖寺藩が赤字財政を<sup>ほてん</sup>補填するためにとった増税策に対する見直しや十村役の廃止などでした。この一揆に対して大聖寺県はやむなく兵士を出動させ発砲したので、農民1人が死亡し数人が負傷しました。やがて農民たちは退散し、同日の深夜、一揆は<sup>ちんてい</sup>鎮定しました。この一揆では8人から9人が逮捕され、<sup>しゅぼうしゃ</sup>首謀者であった<sup>かみぶんぎょう</sup>上分校村の<sup>あらいえり</sup>新家理与門は、翌年6月、金沢の刑務所で<sup>よもん</sup>獄死しました。現在も分校町には、明治28年に江沼郡の町村長が発起人となって建てられた理与門の石碑があります。

## 明治・大正期

### 明治天皇の北陸巡幸

明治11年(1878)5月23日、明治政府は太政官布告で天皇の北陸道・東海道の巡幸

を行なうことを発表しました。巡幸は右大臣岩倉具視や参議大隈重信らに従え、総勢 798 人という空前の人数でした。

8月30日に東京を出発し、富山県（当時は石川県）に入ったのは9月28日でした。一行は金沢に3日間滞在し、この間、天皇は石川県庁で県令より県治事業の概要などを聴き、産業などの公益功績者の具申を受けました。そのなかには、製茶の渡辺宗三郎や琵琶湖に汽船を走らせた石川嶂、九谷焼画工の浅井一毫など、大聖寺の人たちもいました。10月6日には、小松の串茶屋村から動橋村に入り、その日の午後到大聖寺町に到着しました。敷地村では、前田利啓をはじめ、錦城、有隣の両小学校の児童たちが出迎えを行い、行在所となった錦城小学校には急遽「御座所」がつくられ、その部屋で休憩されました。その日のうちに、行列は従来からの北国街道ではなく、明治9年にできたばかりの熊坂新道を通して福井の方へ向かいました。



明治天皇行在所記念碑  
(加賀市立錦城小学校)

## 加州松島社と鉛筆製造

明治8年(1875)に、富士写ヶ岳山麓の片谷村で良質の黒鉛が発見されました。この黒鉛を利用して鉛筆製造をしようと考えたのが、旧大聖寺藩士で、当時、大蔵省の役人をしていた飛鳥井清



柿沢理平の墓  
(大聖寺下屋敷久法寺)

でした。彼は、この鉛筆製造を窮乏していた旧大聖寺藩士の士族授産の一助にしたいと考えたのでした。ちょうどこの頃、オーストリアのウィーン万国博覧会(明治6年開催)で鉛筆製造の技術を学んできた井口直樹の指導

を得ることができ、明治10年(1877)12月、飛鳥井は旧藩士の柿沢理平を工場長にして「加州松島社」という会社を大聖寺松島町に創設しました。理平はさまざまな工夫を重ねて、ついには同16年オランダのアムステルダム万国博覧会で第一級第一等賞を獲得し、舶来品に劣らない良質の鉛筆を大量に作り出すことに成功しました。これは、同20年に三菱鉛筆の創始者真崎仁六が鉛筆の製造を始めた時よりも4、5年早いことになります。大聖寺山ノ下寺院群の一つ、久法寺境内には鉛筆製造に生涯を捧げた柿沢理平の墓があり、その戒名には「制鉛院造筆日肇居士」と刻まれています。



飛鳥井清

## 九谷焼の振興

明治9年(1876)に大聖寺の大沢十次郎は、アメリカ合衆国独立100周年を記念して

開かれたフィラデルフィア万国博覧会に江沼郡の九谷焼や製茶を出品するために、金沢の貿易商、<sup>えんなかまごべい</sup>円中孫平とともにアメリカに渡りました。帰国後、横浜に店舗を開き、九谷焼や漆器、製茶などの郷土の物産を販売しました。同11年にはシカゴに支店を設け、販路を拡大しました。一方、大聖寺の井上商店（屋号「陶源」）も山中漆器や九谷焼を海外に輸出する貿易商として活躍していました。とくに、海外の需要に基づき江戸時代の中頃の<sup>そめにしきいまり</sup>染錦伊万里の写しを大量に生産しました。これらの焼物は、仕上がりが大変良く、「<sup>だいしょうじいまり</sup>大聖寺伊万里」と呼ばれて、江沼郡における九谷焼業界の隆盛を築くもととなりました。



大聖寺伊万里


 大正期の織物工場  
(大聖寺町)

## 絹織物業と製糸業の発展

江戸時代より、庄や大聖寺において生産された絹織物は、近代以降も江沼郡における最も重要な工業製品でした。なかでも、真っ白で肌ざわりのよい「<sup>はぶたえ</sup>羽二重」と称する製品は福井県や石川県の特産品となり、高い生産額を誇っていました。江沼郡では主に大聖寺で生産されたため、「<sup>だいしょうじはぶたえ</sup>大聖寺羽二重」として全国に知られ、海外にまで輸出されました。その後、<sup>そあく</sup>粗悪な製品を出したことで評判を落としたり、大聖寺の大火により多くの工場や事務所を焼失したりしたために、一時、生産が振るわなくなった時期もありました。その後、<sup>しのはらとうべい</sup>篠原藤平や<sup>しみずこうへい</sup>清水孝平、<sup>とよだなべきち</sup>豊田鍋吉などの大聖寺の機業家たちの努力により、大聖寺の絹織物は再び隆盛をむかえました。

一方、<sup>ようさん</sup>製糸業は、<sup>ようさん</sup>養蚕の副業として江戸時代から行われていましたが、明治15年(1882)に郡内に2ヶ所の<sup>せいし でんしゅうじょ</sup>製糸伝習所を設けたことで発展の基礎が築かれました。

同36年(1903)には郡立製糸伝習所が設置され、製糸業は郡内一円に広まりましたが、大正中頃からはしだいに衰退していきました。

## リム・チェーンの製造

当地は全国でも有数の、バイク、自動車、機械などのリムやチェーンの部品製造の拠点地となっていますが、そのきっかけとなったのは<sup>あらいえくまきち</sup>新家熊吉という1人の漆器職人の力によるものでした。

初代新家熊吉は元治元年(1864)に、山中村で漆器木地を挽く職人の家に生まれました。16歳のとき、すでに家業を継ぎ、すぐれた技術を身につけて、家業を成長させました。明治32年には漆器を輸出するために中国やロシアなどに出かけましたが、その旅先



新家熊吉像 (山中温泉)

で見た自転車に強い関心をもちました。それは、自転車の車輪（リム）が木製であり、その製造に漆器製造の技術が役立つのではないかと考えたからでした。

明治36年（1903）に、熊吉は従業員15名で自転車の木製リムを製造する会社「新あらや家しょうかい商会」をつくりました。新家商会の木製リムは、ほとんどの国産の自転車リムに利用されるまでに成長し、大正2年（1913）には、鉄製リムの生産に切り換えるなど、新家商会はこの分野では日本有数の会社にまで発展しました。この新家商会がもとになり、その後、いくつかの変遷を経て、現在の大同工業株式会社（加賀市熊坂町）や新家工業（大阪市中央区）となりました。

## 大聖寺博覧会の開催

「大聖寺博覧会」は、明治12年（1879）の4月から5月にかけて、15日間にわたり、大聖寺の錦城小学校と遷明中学校の2ヶ所を会場に盛大に開催されました。この博覧会は、旧大聖寺藩の家老前田幹や権大参事飛鳥井清らが企画したものです。明治維新後の江沼郡における初の博覧会の開催であり、石川県内でも明治5年の金沢展覧会、同7年の金沢博覧会に次ぐ早い時期の開催でした。



「大聖寺博覧会記事」  
（国立国会図書館所蔵）

## 大聖寺川を利用した水力発電事業

明治15年（1882）に、日本で最初の電灯事業が始まって以後、電力需要は徐々に高まり、当地にもその波が押し寄せてきました。同44年（1911）に、電力の必要性をいち早く感じていた北前船主たちが中心となって、「大聖寺川水力発電株式会社」が創立されま



大聖寺水力発電所が在った付近  
（山中温泉大聖寺川上流）

した。山中町に発電所を作り大聖寺や山中・山代の温泉地へ電力供給を始めたのです。一般家庭への電灯供給が第一の目的でしたが、この地域ではそれ以外にも特殊な需要がありました。山中・山代の温泉旅館が電灯を必要としていたこと、大聖寺を中心とする機織業や新家商会などを中心とした企業などが電気動力を必要としていたこと、さらには当時すでに山中、大聖寺間と山代、動橋間を結んでいた馬車鉄道を電化するために発電が急がれていたという背景がありました。

## 大津事件と北ヶ市市太郎

大津事件とは、明治24年（1891）年5月に日本を訪問中のロシア帝国の皇太子ニコライ（のちに帝政ロシア最後の皇帝となったニコライ2世）が、今の滋賀県大津市で、警備にあっていた巡查・津田三蔵に突然斬りかかられ負傷した暗殺未遂事件のことをいい

ます。この時、津田を組み伏せ、サーベルを奪い、皇太子ニコライの命を救ったのが、ニコライ一行の人力車の車引きをしていた北ケ市市太郎がいちいちたろうともう1人の車夫、向畑治三郎むかいはたじさぶろうの2人でした。北ケ市市太郎は江沼郡庄村字加茂あざかも（現在の加賀市加茂町）の出身で、身長は2メートル近くの大男で、同20年に29歳で京都に出て人力車の車夫になったと伝えられています。事件後、この2人は一躍、救国の英雄として全国から注目を集めることになり、政府から年金36円が支給されただけでなく、ロシア政府から当時の金額で2500円の報奨金と1000円の終身年金が与えられました。その後、市太郎は郷里、江沼郡に帰り、同32年の郡会議員選挙に出て当選し、郡会議員を務めるなど郷土の名士となりました。しかし、その後、日露戦争がおこると、彼はロシアのスパイと非難を受けることとなり、寂しい人生をおくりました。



北ケ市市太郎寄進灯ろう  
(加賀市加茂町白山神社)



明治期の人力車  
(モース・コレクションより)

## 八十四銀行の創業と破綻

明治11年(1878)11月に、大聖寺だいはちじゅうしこくりつぎんこうに第八十四国立銀行が設立されました。当時は、金禄公債きんろくこうさいを資本金として全国に150行余りの国立銀行が設立され、八十四銀行はその一つでした。その後、八十四銀行は本店を東京の京橋に移し、大聖寺をただ一つの支店として経営を続けました。同30年5月には、酒問屋を経営していた東京の中沢彦吉なかざわひこきちが譲り受け、八十四銀行は普通銀行に移行しました。その後、大聖寺のほかに、東京に5ヶ所の支店を設け、首都圏における二流銀行としての地位を築きました。



八十四銀行本店建物  
(大聖寺鍛冶町)

八十四銀行が順調に営業を続けていくことができたのは、創業地である大聖寺支店での織物業主や北前船主らの多額の預金を背景とした高い業績のためと言われています。

ところが、関東大震災や世界恐慌とそれに伴う大聖寺の織物業の不振などのあおりを受け、八十四銀行は昭和2年(1927)3月に突然の休業に入りました。これにより、江沼郡では八十四銀行への取り付け騒ぎがおきました。郡役所や大聖寺町、大聖寺商工会は預金者への救済に乗り出しましたが、営業再開の目途はたちませんでした。結局、昭和3年、いくつかの休業銀行を整理統合した昭和銀行しょうわぎんこうをあらたに設立することで解決が図られました。半世紀にわたって江沼郡の金融を支えてきた八十四銀行はついにその姿を消しました。

## 片山津温泉の発展



片山津温泉縁起略図（部分）  
（「加賀の文化」第7号より）

かたやまづ じょうおう  
片山津温泉は、承応2年（1653）に、のちに大聖寺藩2代藩主となる前田利明が柴山瀧に鷹狩りに訪れた際、水面に水鳥が群れていたことから湖底の温泉を発見したことが始まりと伝えられています。その後、幕末から明治初年にかけて温泉の掘削を試みた記録がいくつかありますが、いずれも安定した湯量を確保することはできませんでした。

明治9年（1876）に、当時、県の役人であった近藤幸即（こんどうこうそく）らが柴山瀧で大規模な埋め立て工事を行ない、その結果つくられた人工島に橋が架けられ、ようやく人々が温泉に入浴できるようになりました。明治15年（1882）6月28日には、石川郡観音堂村から井戸掘りの森仁平（もり に へい）を招き、特殊な工法で掘削し、湯量を確保することに成功しました。のちに、片山津温泉では、この日を開湯記念日として「湯の祭り」が始められるきっかけとなりました。

## 議会と選挙

明治政府は明治22年（1889）2月に大日本帝国憲法（明治憲法）を発布し、翌年11月に第一回帝国議会を開きました。以下、帝国議会・県会・郡会・町村会について簡単に見ていきましょう。

【帝国議会】帝国議会は、衆議院（定員300人、任期4年）と貴族院（任期7年）の二院で構成されていました。衆議院の選挙資格は、直接国税15円以上を納める25歳以上の男子に限られていました。貴族院は、皇族・華族や天皇の選任による勅撰議員と多額納税者の互選議員で構成されていました。衆議院選挙では明治23年の第1回で相川久太郎（無所属）、同27年の第3回で梅田五月（自由党）、同35年の第7回、同36年の第8回、同37年の第9回、同41年の第10回で上出長次郎（政友会）、同45年の第11回で相川久太郎の江沼郡関係者がそれぞれ当選しました。貴族院では同37年に広海二三郎（瀬越村海運業）、同44年に大家七兵衛（左同）が互選議員に選ばれました。

【県会】府県会は、明治11年の府県会規則に基づき翌年4月から開設されました。その選挙資格は同年が地租5円以上納税の20歳以上男子、同32年が直接国税3円以上の納税者となっていました。江沼郡の議員数は初め3人、同40年に2人となりました。江沼郡選出議員は延べ24人で、その中で梅田五月（大聖寺町長）、西田彦平（三木村長）、稲手吉五郎（分校村長）、稲葉市次郎（作見村長）、坂野忠宗（黒崎村長）、本川進（東谷口



梅田五月銅像  
（大聖寺地区会館前）



江沼郡役所建物（大正 12 年頃）

ろう くぼひこべえ  
郎・久保彦兵衛

坂野忠宗・稲葉市次郎・本川進・篠原藤平などは著名な議員でした。

村長)などは著名な議員でした。

【郡 会】郡会は明治 11 年に正式な行政区画となっていたものの、その機能を本当に果たすのは同 32 年頃からでした。郡会は初め村会の複選議員（任期 6 年）と大地主の互選議員で組織されていましたが、同 32 年の改正で複選制を廃止し、議員数を大聖寺町 3 人、他町村 1 人ずつ、任期 4 年と決めました。西田彦平・稲手吉五郎・北ヶ市市太

きた がいちちた  
きた がいちちた

【町村会】町村会は明治 12 年の町村会規則に基づき 1 年に 1 回、1 回に 3 日以内と定められました。これ以前、同 6 年頃には地方官と戸長の事務打合会的な区会がありました。町村会は同 21 年の市制・町村制や同 23 年の府県制の制定によって、公法人の町村の議決機関、監査機関、行政裁判機関の地位をもち、運営も議会として体裁を整えました。議員は土地や家屋の所有者から選ばれ、これは地主議会の性格が強いものでした。

## 町村の財政

ここでは町村制施行後の 1 町 24 ヶ村で構成する江沼郡全体の町村財政を、明治期と大正期について概観しましょう。

【明治期】明治 25 年（1892）の財政をみると、歳入は基本財産収入、雑収入、前年度繰越金、国庫交付金、県税交付金、寄付金、町村税、郡費など合計約 4 万 819 円でした。町村税は各町村で歳入全体の約 80% を占めていました。町村税には個別割、地価割、営業割の 3 種類（国税や県税の付加税）があり、個別割収入が約 60% を占めていました。歳入規模は大聖寺町が 6558 円で最も多く、これに山中村、山代村、東谷奥村・塩屋村・篠原村・三木村などが続きました。



大聖寺町役場建物

（上段は大正期の役場建物。昭和 9 年の大火で焼失した。下段は大火以後に再建された。）



旧町村役場資料  
（加賀市立中央図書館所蔵）

一方、歳出は役場費、会議費、土木費、教育費、衛生費、救助費、警備費、勸業費、諸税及負担など合計約 3 万 9204 円でした。教育費は歳出全体の約 46%、ついで役場費が約 34% を占めました。つまり、経費の大部分は小学校や夜学校の経営と町村役場の人件費、物件費に使用されました。歳出規模は大聖寺町が 6181 円で最も多く、これに山中村、山代村、瀬越村・月津村・作見村・動橋村などが続きました。各町村では小学校費（約

70% が教員給料）の財源として授業料や町村税のほか、寄付金や雑納税を充てました。

【大正期】大正 9 年（1920）の財政をみると、歳入は基本財産収入、使用料・手数料、前

年度繰越金、町村税、交付金、補助金及奨励金、寄付金、公債及繰越金、雑収入その他など合計約 54 万 1044 円でした。町村税は各町村で依然として歳入全体の約 75% を占めていました。国庫交付金は同 7 年に教員棒給の一部を国が負担する制度が実施されたため、その比重が大きくなりました。町村税は明治末期から政府が市町村の付加税を認めたので、付加税の種目が増加しました。なお、大聖寺町では独立税として特別税の賦課が認められました。各町村税の実収額は総額 40 万 8752 円に達し、明治 25 年の約 40 倍近くとなりました。

一方、歳出は役場費、会議費、土木費、教育費、衛生費、警備費、勸業費、諸税及負担（郡費）、基本財産及積立金、神社費、その他支出など合計約 51 万 2219 円でした。教育費と役場費の合計比重は歳出全体の約 43% で、町村制施行直後の 80% に比べて半減していました。これに対して、土木費、衛生費、警備費・雑支出などの比重が高まりました。とくに、郡費は明治 25 年の 5% から 17% に上昇しました。住民 1 人当りの支出額も、明治 25 年の 63 銭 6 厘から 9 円 30 銭に上昇しました。

## 近代の教育

明治政府は明治 4 年（1871）7 月に文部省を設立し、同 5 年 8 月にフランスをモデルとした学制を公布しました。この内容は全国を 8 大学区に分け、各大学区を 32 中学区、各中学区を 210 小学区に分けて、全国に 5 万 3760 の小学校を設け、小学・中学・大学と一貫した教育制度を確立する計画でした。石川県では同 6 年に区学校規則を定め、江沼郡を第 2 大学区 23 中学区とし、学校の設立を推奨しました。



明治期・動橋小学校授業風景  
（写真集「加賀・江沼」より）

江沼郡では同年に錦城・京達・有隣・旗陽の大聖寺 4

校をはじめ、塩浦（塩屋）、竹浦（瀬越）、三木、対溪（長谷田）、山中、脩来（塔尾）、開陽（山代）、勅使、那谷、打越、動橋、玄笠（七日市）、保賀、尚禮（片山津）、北浜（橋立）、とくち、しのほら、しばやま、得知（篠原）、柴山などの 21 小学校が設立されました。同 7 年には南郷、新知（作見）、月津の 3 小学校と、我谷、大内、枯淵、風谷、真砂、坂下、小杉などの巡回授業所が開設されました。小学校は統廃合や



明治 11 年頃の錦城小学校建物

名称の変更が随時行われたため、その沿革や校数は必ずしも明確ではあまりせん。ともあれ、江沼郡には同 13 年までに小学校が 40 校ほど設立されました。

当初、その校舎には寺院や民家などが多く充てられ、教師には旧藩士や神官・僧侶などが多く採用されました。文部省は同 5 年 9 月に小学教則を公布し、小学校を上等 4 年（6

～9歳)と下等4年(10～13歳)の8級(8年制)に分け、授業期間を6ヶ月間とし、日曜日を除き1日5時間、1週30時間の課程としました。当時の教科書は欧米文化を紹介した啓蒙書や翻訳書が多く、とくに理科や世界地理が重視されました。就学率は同6年に28%でしたが、同10年には40%となりました。

中学教育では明治8年3月に旧藩邸に<sup>きゅうはんてい</sup>変則<sup>へんそく</sup>中学校が創設されましたが、わずか4ヶ月で廃止されました。ついで同11年6月には、八間道に郡立<sup>はちけんみち</sup>遷明<sup>ぐんりつせんめい</sup>中学が設立されましたが、これも同19年に廃止されました。その後、大正12年(1923)に至り、県立大聖寺<sup>じゅうか</sup>中学校が設立されました。女学校はこれより早く、明治44年に郡立<sup>じゅうか</sup>実科<sup>じつか</sup>女学校(のち県立大聖寺高等女学校)が設立されました。

## 近代の戦争と犠牲者

金沢に歩兵第七連隊が配置されたのは明治8年(1875)9月のことで、この連隊が初めて戦闘に参加したのは、旧薩摩藩を中心とする士族が西郷隆盛を擁して起こした同10年の「西南の役」でした。西南の役は明治期最大の士族反乱で、この戦いにおける石川県の戦没者は459名と極めて多く、この後、勃発した日清戦争での犠牲者の2倍にもなっています。なお、この西南戦争における江沼郡出身の従軍者は75名で死者は8名でした。

明治27年(1894)の日清戦争は、日本が中国大陸や朝鮮半島で行った大規模な対外戦争でしたが、この戦争での石川県全体の戦没者は197名で、このうち江沼郡出身者は19名でした。

明治37年(1904)の日露戦争においては、その犠牲者は日本全体で6万人を超え、日清戦争とは比較にならないほどの犠牲を被りました。江沼郡出身の戦没者も211名にのばりました。

昭和16年(1941)12月の日米開戦から同20年の敗戦までの間、太平洋戦争で犠牲となった石川県関係の戦没者は2万2788人という大きな数となっており、このうち江沼郡出身の戦没者は1536人でした。



加賀市忠霊塔(大聖寺錦城山麓)

## 北陸線の開通と電車網の整備

明治26年(1893)に、敦賀から富山までを結ぶ、国営による北陸線の敷設工事が始まりました。同30年には福井・金津などを経て、大聖寺・小松に至る工事が完了しました。大聖寺駅がオープンしたのが、この年の9月20日で、当日、大聖寺駅構内には多くの人々が押し寄せて、警官や駅員がその整理にあたり、列車が到着すると大歓声があがり町民こぞって大喜びしたと伝えられています。

ところで、江沼郡に北陸線が開通したことで、本線から奥まったところに位置していた



山中馬車鉄道  
 (「写真集加賀・江沼」より)

山中温泉で山中馬車鉄道株式会社が設立され、同 33 年 5 月から山中温泉と大聖寺駅を結ぶ 8.6km の馬車鉄道が開通しました。引き続き、同 43 年に山代温泉と動橋間が、大正 3 年には動橋と片山津温泉間を走る馬車鉄道がそれぞれ開通し、江沼郡内における北陸線と各温泉地を結ぶ交通網が完成しました。なお、大正元年(1912)9月には山中馬車鉄道は山中電気軌道と社名を改め、石川県内で最初の電化を実現しました。これを機に、山代や片山津の各鉄道馬車も

温泉電気軌道株式会社として運営が一元化され、加賀温泉郷を結ぶ路線すべてが電車に切り替わりました。以後、この電車は、昭和 17 年(1942)までの約 30 年間にわたって「温電」の名前で愛され続けました。

## 昭和時代

### 新憲法と選挙

幣原内閣はGHQ(連合軍総司令部)と何度も交渉を重ね、国会の論議を経て昭和 21 年(1946)11月3日に「日本国憲法」を公布しました。その最大の特色は、主権在民、基本的人権の尊重、平和主義にありました。

新しい衆議院選挙は昭和 21 年(1946)4月に行われました。石川県は全県 1 区で定数 6 名に 34 人の立候補者がありました。大聖寺町出身の竹田儀一は戦前からの実績で当選しました。翌年 4 月の総選挙からは、金沢以南江沼郡までを 1 区、河北郡以北を 2 区と改めました。竹田儀一は同年にも当選し、国務大臣や厚生大臣として国政に参与しました。同 24 年の総選挙には三木村出身の坂田英一が初当選し、以後 7 回も当選、同 40 年には農林大臣として、わが国農政の推進者となりました。同 27 年の総選挙には東谷奥村出身の辻政信が初当選、以後 3 回当選、さらに参議院全国区議員にも当選して、名参謀の名を政界にも残しました。

憲法とともに公布された地方自治法も、旧法の官治的性格を捨て真に民主的なものになりました。同 22 年 4 月には新法に基づく地方首長選挙や町村議会議員選挙が行われ、全国各地に新町村長や新町村議会議員が生まれました。なお、同 29 年には大聖寺町長のリコールが成立しました。



坂田栄一



竹田儀一

## 江沼郡の農地改革

政府はGHQの指令に基づき、昭和22年(1947)から同25年まで農地改革を実施し、3年間で19万7000町歩の農地を買い上げ、小作人に売り渡しました。その結果、自作農数は改革前の284万戸から541万戸へと飛躍的に増加し、小作率は45.9%から8.3%に激減しました。



柴山潟干拓による水田地帯  
(加賀市柴山町)

石川県では昭和22年から同28年まで1万299町歩の農地が、延べ5万1054戸の地主から買収されました。この買収面積は、小作地総面積の75.4%に当たりました。江沼郡でも同期間に1081町歩の農地が、延べ5710戸の地主から買収され、5295戸の農家に売り渡されました。その結果、小作地は23.2%から8%に、小作農家も11%から5.7%に減少しました。買収面積は月津村・片山津町・動橋町・矢田野村・山代町などで多くみられました。

永小作地は加賀の江沼郡・能美郡と能登の羽咋郡・鹿島郡に多く、江沼郡では三谷村・勅使村・山代町・片山津町などに多くありました。なお、柴山では地租改正後の明治19年(1886)と、農地改革後の昭和26年に地割(田地割)を実施しました。これは柴山潟の排水が土砂で閉塞されて水面が上昇し、田地が水害に見舞われたためです。

## 福井震災と郷土

戦災の記憶がまだ覚めやらぬ昭和23年(1948)6月28日の夕方、福井県坂井郡丸岡町(現在の福井県坂井市丸岡町)付近を震源とする大地震が発生しました。地震の規模はマグニチュード7.1でしたが、きわめて浅い直下型地震であったため、江沼郡内でも大きな被害がでました。とりわけ大聖寺町、三木村、瀬越村、塩屋村など、福井との県境に近い町村の被害は甚大でした。結局、江沼郡全域では、死者39名、負傷者451名、住宅全壊791戸、半壊1231戸をはじめ、北陸線の断絶、牛の谷トンネルの崩落をはじめ、各地の橋が落下するなど、多くの被害をだす未曾有の大惨事となりました。



福井震災による被害の様子(大聖寺八間道)

## 学問と芸術

鳥羽・伏見の戦いで幕府軍が敗北するや、大聖寺藩は、当初の幕府側から一転して新政府側につきました。この間、政治的には主体的な動きができなかったこともあり、その分、教育の振興や学芸の奨励に力をいれました。

幕末、大聖寺藩は優秀なる藩士を多数、大坂の緒方洪庵の適塾や江戸の福沢諭吉の英学塾、安積良斎が指導する塾をはじめ、金沢や越前大野、長崎などに派遣しました。

また、最後の藩主、14代前田利鸞も漢学や歌道、絵画、書道、茶道、能楽など幅広い教養を身につけ、とくに能楽では宝生流を極め、素人ながら芝公園能楽堂の舞台にも立ち、また謡二百五十番を諳んじていて、どんな曲でも求められれば即座に歌うことが出来たといわれています。利鸞の努力もあり、この後、大聖寺では錦城能楽会が誕生し、宝生流の能楽が伝承されるきっかけとなりました。



中谷宇吉郎



深田久弥

当地域のこうした学芸を尊ぶ風潮は、明治、大正、昭和と受け継がれ、哲学者の木村素衛や憲法学者の上杉慎吉、考古学者のみつもりさだお、科学者の中谷宇吉郎や大幸勇吉、作家の深田久弥、生物学者の木村有香、医学者の桂田富士郎、本川弘一、歌人の西出朝風などを輩出する要因ともなりました。

## 加南線の廃止と加賀温泉駅の誕生

大正元年（1912）から30年間にわたって親しまれてきた「温電」は昭和17年（1942）に北陸鉄道株式会社に吸収合併され、それ以後は「北陸鉄道加南線」として加賀温泉郷を訪れる観光客の足として活躍し続けました。

このころ、山代温泉や山中温泉、片山津温泉の宿泊客は、北陸線の大聖寺駅か動橋駅で降車をして加南線に乗り換えて各旅館に向かいました。

ところが、当時、国鉄では特急や急行の停車駅を一本化することで準備に入り、最終的には大聖寺と動橋の中間の作見駅を、加賀温泉郷の統合駅とすることに決定しました。その結果、昭和45年（1970）、北陸線作見駅が、特急・急行が停車する「加賀温泉駅」としてオープンしたのです。

これにより、北陸線の大聖寺駅や動橋駅には特急や急行が停車しなくなり、そのため加南線の利用者が激減しました。また、バス路線の充実やマイカーブームのあおりで、電車利用客が減少していたこともあり、ついに、昭和40年（1965）9月片山津線の廃止、昭和46年（1971）7月、山代・山中線の廃止をもって加南線は姿を消しました。以後、加賀市の交通体系の中心は、加賀温泉駅を基点としたバス運行に切り替わったのです。

片山津・動橋間の加南線電車  
（昭和30年頃 動橋駅）

## 加賀市の誕生



加賀市制発足祝賀会  
(錦城小学校講堂)

政府はシャウブ<sup>かんこく</sup>勸告を受けて町村合併の気運を盛り上げ、昭和28年(1953)9月に町村合併促進法<sup>そくしんほう</sup>を制定しました。石川県は当初、大聖寺、山中、山代、片山津の4ブロック試案を支持していました。同29年3月には県内トップを切って大聖寺町が瀬越村を編入、片山津町が篠原村を編入、同年11月には動橋町と分校村が合併しました。同30年1月には山代町と勅使村・東谷口村が合併、同年4月には山中町と河南村・西谷村・東谷奥村が合併、矢田村・

月津村(字柴山を除く)・那谷村が小松市に編入、柴山が片山津町に編入されました。この結果、同29年度末には、それまでの21町村から大聖寺町・山代町・山中町・片山津町・動橋町・橋立町・三木村・三谷村・南郷村・塩屋村の6町4村に整理されました。

しかし、財政が逼迫<sup>ひっぱく</sup>した町村ではさらなる合併を望む意見もあり、江沼郡全体を1つの市にできないかという声次第に高まりました。昭和31年4月には郡町村議長会でも全員がこうした考えに賛同し、一本化を町村会に申し入れました。同年8月には、ついに江沼郡の10町村を1つの市とするべく第3次試案が県において提案されました。同年12月には、態度を決めかねていた山中町を除く9町村長および議長が「加賀市建設委員会」を結成しました。山中町に対しては、同32年3月に知事勸告<sup>かんこく</sup>、同年12月に内閣総理大臣の合併勸告も発せられましたが、ついに同意を得るには至りませんでした。結局、昭和33年(1958)1月に、山中町を除く9町村の合併により「加賀市」が誕生しました。加賀市は石川県で6番目の市制成立となりました。同年2月には初の市長選挙が行われ、山中町出身で大同工業社長の新家熊吉<sup>あらいえくまきち</sup>が当選しました。ついで、同月には市内9ブロックの選挙区から28人の市議会議員が選出されました。

なお、平成17年(2005)10月に加賀市と江沼郡山中町が合併し、新加賀市が成立しました。



加賀市新庁舎完成  
(昭和35年6月)

## あとがき

本書は「加賀市の歴史文化」でありながら、時の中央政府の動きに影響を受けていることが意外と多いことに気づかされます。

今は亡き稲坂謙三先生や牧野隆信先生は、当市の歴史の中で、日本の歴史・文化に特に大きな影響を与えたのは「一向一揆・北前船・古九谷」の3つであると口癖のように言われていました。一向一揆は宗教すなわち人々の信仰心であり、北前船はビジネス・経済活動、そして古九谷は芸術に影響を与えたのです。本書をお読みいただき、これら3つの事項に限らず、加賀市にはいかに数多くの歴史・文化資産があるかを再認識いただければ幸いです。

今回の「歴史編」作成にあたっては、昨年、加賀商工会議所にて作成した「ウェブテキスト」を基に、古代編では田嶋正和氏に、中世編では伊林永幸氏に、近世編および近現代編では山口隆治氏に追加執筆をいただきました。写真撮影では中村準一氏の協力を得ました。また、文化庁の助成を受けるにあたり、市教委文化財保護課の東由季さんにも大変お世話になりました。これらの方々のご協力に感謝の意を表すると共に、本書が多くの加賀市民の皆様方にご利用されますことを願うものであります。

平成26年8月

加賀ふるさと検定・おもてなし講座実行委員会  
事業部長 見附 裕史(加賀商工会議所専務理事)

## 加賀ふるさと検定テキスト 加賀市歴史文化学習帳 I 歴史編

[発行] 平成26年8月31日

[編集・発行] 加賀市文化財総合活用事業実行委員会

加賀ふるさと検定・おもてなし講座実行委員会  
加賀市大聖寺菅生ロ17の3 加賀商工会議所内(〒922-8650)  
TEL.0761-73-0001 FAX.0761-73-4599

[印刷] 有限会社 たけうち印刷

K A G A



加賀市文化財総合活用事業実行委員会  
加賀ふるさと検定・おもてなし講座実行委員会